

Title	「フォアヴェルツ」とドイツ人亡命者達：パリのマルクスに関連して
Author(s)	的場, 昭弘
Citation	一橋大学社会科学古典資料センター Study Series, 12: 1-32
Issue Date	1987-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/16627
Right	

『フォアヴェルツ』
とドイツ人亡命者達

——パリのマルクスに関連して——

的 場 昭 弘

目 次

はじめに.....	1
(1) 『フォアヴェルツ』の発刊	1
i) ドイツ人亡命者とパリの出版界	1
ii) ベルンシュタインと『フォアヴェルツ』の刊行	4
a. 『フォアヴェルツ』.....	4
b. 『フォアヴェルツ』の1月から6月までの内容	6
c. ボルンシュテットと「ドイツ人救済協会」.....	7
iii) 『独仏年誌』と『フォアヴェルツ』	8
a. 『独仏年誌』の人々	8
b. 『独仏年誌』への評価	10
(2) 『フォアヴェルツ』の変化	13
i) ベルナイスの編集への参加	13
ii) 7月後の記事の内容	14
(3) 『フォアヴェルツ』への弾圧	17
i) ベルナイスの記事への裁判	17
ii) マルクス、ルーゲ等の追放	21
結 び.....	25
注.....	25
引用文献一覧.....	28

『フォアヴェルツ』とドイツ人亡命者達

—— パリのマルクスに関連して ——

的 場 昭 弘

はじめに

本稿が問題とする1844年の『フォアヴェルツ』(*Vorwärts*) [B, 6] は非常に興味深い論点を持っている。その論点とは第一にこの新聞がパリで創刊されたパリのドイツ人亡命者(Emigrant—ここでは職人の遍歴者も含めて亡命者という使い方をする)の新聞であり、当時の共産主義運動と深く関係しているという点、第二にこの新聞にマルクスおよびエンゲルスが関係し、そこで直接および間接の論文を書いたという点、第三にルーゲが編集した『独仏年誌』(*Deutsch-Französische Jahrbücher*) [B, 3] と密接に関係していたという点、そして第四にマルクスの国外追放(ブリュッセルへ)の直接の原因になったという点である。このように非常に興味深かつ重要な新聞であるにもかかわらず、現在まであまり研究はなされてはいない⁽¹⁾。本稿は、この『フォアヴェルツ』誌を検討することによって、1844年のマルクスの不明確な部分に光を与えることを目的としている。おそらく『フォアヴェルツ』誌の研究はマルクス研究に一つのインパクトを与えるかもしれない⁽²⁾。なぜならルーゲ、マルクス等数人で作った『独仏年誌』よりも、『フォアヴェルツ』誌のほうが多くの共産主義者の交流の場であり、パリのドイツ人の中心的な組織であったからである。フォアメルツ(Vormärz-三月前期)を彩る共産主義者の多くがこの新聞と関係していたと言っても過言ではない。マルクス(Marx) (1818-83)、ルーゲ(Ruge, A.) (1802-80)、エンゲルス(Engels) (1820-95)、ヘルヴェーク(Herwegh, G.) (1817-75)、モイラー(Mäurer) (1811-85)、バクーニン(Bakunin) (1814-76) (ロシア人との関係については[E, 11] 参照)、G. ヴェーバー(Weber) (1816-1901)、バルンシュタイン(Börnstein) (1805-29)、ボルンシュテット(Bornstedt) (1808-51)、ヴァイトリンク(Weitling) (1808-71)等の様々のメンバーが『フォアヴェルツ』と直接、または間接的に関係していた。したがって、本稿の展開は当時のドイツ人亡命者との関係も考慮して進められる。

(1) 『フォアヴェルツ』の発刊

i) ドイツ人亡命者とパリの出版界

1844年1月パリで、ドイツ人向けの『フォアヴェルツ』⁽³⁾が刊行されたが、この新聞の購読者の中心はパリで暮らすドイツ人であった。フランスで発刊されたドイツ人向けの新聞・週刊誌はすでにフランス革命後に出た『ドイツ人の傍観者』(*Deutsche Zuschauer*) (1796-1797)を初めとして、

『パリ便り』 (*Pariser Laufbericht*) (1803-1804), 『ドイツ・パリ新聞』 (*Deutscher Pariserzeitung*) (1815), 『新ドイツ・パリ新聞』 (*Neue Deutsche Pariser Zeitung*) (1825), 『立憲ドイツ』 (*Das Constitutionnelle Deutschland*) (1831-1832), 『世界』 (*Le Monde*) (1836-1837), 『エルヴィナ』 (*Erwina*) (1838-1839), 『パリ新聞』 (*Pariser Zeitung*) (1838-1839), 『時代』 (*Die Zeit*) (1839), 『フォーラム』 (*Forum*) (1839), 『星』 (*Der Stern*) (1843) [E, 23, pp. 106-117] などがあった。さらにこれに月刊誌, 年誌をいれると, 『追放者達』 (*Der Geachtete*) (1834-1836), 『ルヴュー・ド・ノール』 (*Revue de Nord*) (1834-1836), 『ラ・バランス』 (*La Balance*), 『ブラガ』 (*Braga*) (1838-1839), 『ドイツのパノラマ』 (*Panorama de l'Allemagne*) (1838-1839), 『人民の声』 (*Die Stimme des Volkes*) (1839) から, 1844 年に出た『独仏年誌』などがあった。特に 1830 年以後は毎年のようにひとつふたつの新聞・雑誌が出版されていたことになる。その多くが 1 年以上続かなかったとはいえ, このようにフランスで出版活動が盛んになったことは, 逆にドイツの当時の状況をよく物語っていると言えよう。

フランス, 特にパリで出版活動が盛んになったのは, ドイツ (プロイセンやそのほかの国々) での出版活動が検閲で厳しくなり, 人々がフランスへ自由の地を求めたということと, ドイツでの就業難から大量のドイツ人がフランスへなだれ込み, それが大きな購読者層を形成していたためであった。すでに 1832 年 2 月に「ドイツ人協会」 (*Deutsche Volksverein*) が出版の自由を目標として形成されたが, その中心は仕事を求めパリにやってきた職人層であった [E, 61, SS. 14-28]。やがてこうした団体は, 共産主義運動と関係し, 「追放者同盟」 (*Bund der Geachteten*)⁽⁴⁾ へと発展していくが, 基本的には出版の自由, ドイツ統一をスローガンとしていた。もちろんこうした運動の中心地には他にスイスとイギリスがあり, それぞれ同じように発展していた。しかし, 1840 年代に入り, スイスでの出版・秘密結社に対する弾圧が進むに連れて, スイスでの活動はフランスへと移動するような状況が出来上がり, フランスの亡命者活動の地位は上昇する。フランスの中でもドイツ人の人口の多い地域はドイツ国境地域のストラスブール (*Strasbourg*), ミュルーズ (*Mulhouse*), ナンシー (*Nancy*), メス (*Metz*) とリヨン (*Lyon*), パリであった。特にパリは人口および影響力において, 群を抜く地位を誇っていた。ストラスブールを通る亡命者も, ザールブリュッケン (*Saarbrücken*) を通る亡命者も, トリーア (*Trier*) を通る亡命者もすべてパリへと向かうことになった [E, 61, S. 94 f.]。

それでは, 当時パリには一体どれくらいのドイツ人が住んでいたのだろうか。通常 8 万人と言われているが, おそらくこの数字は誇張であろう。短期滞在者もいるので正確な数字を把握することは困難であるが, 2 万人から 5 万人というところが妥当な人数と思われる [E, 21] [E, 24] [E, 28]。グランジョン (*Grandjone*) はかなり詳細な研究を行っている。彼によると 8 万人という数字は当時のパリの人口の約 1 割に当たり, 非現実的数字で, 人口の少なくとも 20 分の 1, すなわち 4 万人ぐらいが正しい数値ではないかと推定している。しかしいづれにしても, この 4 万人という数字もかなりの数字で, フランスにいたと思われる外国人の人数の実に 5 分の 1 に相当している。ドイツの都市と比較しても当時人口 30 万人のベルリンには遠く及ばないものかなり大きな都市に相当していたといってもいいであろう。したがって 4 万人という人数は充分出版の採算に見合う人数であったといえよう (一般的なドイツ人の移民状況については [E, 28] 参照)。

しかし, 問題は新聞を購入できる所得層の人々の数がどの程度存在したかということにかかってくる。当時のドイツ人職人の日給は 4 フランで [E, 61, S. 106], 『フォアヴェルツ』の価格が 50 サンチームであり, 彼らがおそらく購読者層を形成し得ないことは明らかであろう。パリのドイツ人

職人が、主として裁縫職人 (Schneider)、靴屋 (Schuster) であったということ⁽⁵⁾、文盲率の高さに違いがあったということからしても、他のドイツ都市の購読者層と単純に比較は出来ない状況であったと言えよう。もっとも彼らの政治意識はドイツに住む職人より強く、知的興味の点でもはるかにまさっていたであろうから、実際の購読者層の数はずっと大きなものであったであろう。しかも彼らは秘密結社に加入することによって、より急進的な出版を望む傾向を持っていた。フランスにはそれだけの自由があったからである。

フランスの出版の自由の意味は検閲がないということにあった。ドイツでは『ライン新聞』のような 20 ボーゲン (320 ページ) 以下の出版物の場合、検閲が義務づけられており、しかも 1844 年 1 月 18 日には 1832 年 7 月 5 日の法が拡大され [E, 47, S. 418], 20 ボーゲン以上のものにも検閲義務がかけられようとしていた。フランスでは自由であったと言っても定期刊行物の場合まったく自由であったというわけではなかった。フランスの場合検閲はなかったものの三つの方法によって制限が課せられていた。第一は保証金 (Cautionnement) 制度、第二には運賃の区別 (県の内と外での料金格差)、第三は印紙税制度であった [E, 35, p. 13]。特に第一の保証金制度は厳しいものであった。ドイツ人向けの新聞が短命であった理由としては、パリのドイツ人がフランス語の新聞の方をよく読んだとか、ドイツ人の購読者が絶対的に少なかったとかということもあげられるが、何といても保証金の額が大きすぎたということがあげられよう。保証金の額は時代によって相違があるが、1831 年パリで 2400 フラン、1835 年にはなんとパリで 10 万フランとなったこともあった [E, 54, p. 262]。もちろん保証金を積まなくても最初の 1 年は何とか発行することが出来たので、多くのドイツ語新聞はその手を使い、次々と名前を変えては新聞を継続していったようである。新聞を発行する場合、まず発行者、発行場所、内容を書いたものを予め内務省へ届ければ一応発行することが出来た⁽⁶⁾。実際に出版されて、王を攻撃したり、編集者名を隠ぺいしたり、保証金を滞納し続けた場合、きびしい罰金 (Amende) が課せられ、さらには検事総長 (Procureur général) によって重犯罪裁判所 (Cour d'Assis) へ訴追され、編集者が実刑判決を受ける場合もあった。しかし、その手続きには 1 年以上もかかったので泡沫新聞が消えることはなかった。こうした危険はあるものの、ドイツのように、あらかじめ検閲によって改ざんされたり、お蔵入りになったりすることはなかったため、ドイツ人亡命者たちにとってはパリは天国であったと思われる。

当時のフランスの出版文化は華やかなものであった。印刷機の方も改良に次ぐ改良で 1 時間の印刷量は 1000 枚をこえていた [E, 35, pp. 13-22]。エミール・ジラルダン (Emile Girardin) (1806-81) の『プレス』 (*La Presse*) (1831-1866) のように薄利多売をもくろむ新聞はまさにこうした技術革命を利用し、大量印刷による価格引き下げを行った [E, 30, p. 568]。当時の人々の多くは、新聞をカフェや有料の読書室 (Cabinet de la lecture) で読む習慣⁽⁷⁾を持っており、個人的な新聞の購読者は少なかったが、こうした技術革命によって徐々に新聞の購読者は上昇していった。『プレス』、『ジュルナル・デ・デバ』 (*Journal des Débats politiques et littéraires*) (1814-1864)、『時代』 (*L'Époque*) (1845-1847)、『世紀』 (*Siècle*) (1836-1866) などのような日刊 1 万部から 3 万部の発行部数を持つ新聞などが存在していた [E, 30, p. 581]。ドイツ人亡命者にとってこうしたパリの出版界の繁栄は大きな魅力となっていたと思われる。たとえばルーゲがブリュッセル (Bruxelles)、ストラスブール、チューリッヒ (Zürich) での『独仏年誌』の刊行予定を止めパリに出版地を換えたのも、たんに“独仏”同盟の実現のためやスイスでの弾圧を避けるためだけではなく、それはまたみずからの劇団を捨ててまでパリに留まり、通信社や『フォアヴェルツ』を企画したベルンシュタインにも当てはまるであろう。ドイツ人亡命者の多くは、活動の

場として政治文化の中心地パリを選んだのであるが、それは他方で、華麗なパリの文化に魅せられたからでもあったのだろう。

ii) ベルンシュタインと『フォアヴェルツ』の刊行

a. 『フォアヴェルツ』

『フォアヴェルツ』誌は、1844年に発刊されているが⁽⁸⁾、1843年11月には宣伝(Prospectus)がパリのドイツ人コロニー(居住区)に配布されていた。この宣伝と並行して、『フォアヴェルツ』誌の編集者ベルンシュタインは内務省(Ministère de l'intérieur)に『フォアヴェルツ』の届け出を行っている[A, 1, b]。この届けは一般的な手続きの一つであった。12月5日に以下の届けを提出する。「内務大臣どの。下に署名したものは、1844年1月1日から『フォアヴェルツ』というタイトルで週2回発行のドイツ語の政治と無関係の新聞を発行することを申請します。同封の宣伝の内容を持つこの新聞はポール・レヌアール(Paul Renouard)氏のもとで印刷予定です。編集は文学者アンリ・ベルンシュタイン氏に委ねられ、新聞にはそのサインを付けます。下に署名したものは、尊厳を持って1828年7月18日法によって禁止された条件を守ることを宣誓いたします。内務大臣閣下どの。アレキシ・レイノー(Alexis Reynaud), サントノレ(Saint-Nonoré)街149番。アンリ・ベルンシュタイン、『アウグスブルク・アルゲマイネ新聞』(*Augusburg Allgemeinezeitung*)の編集者兼ムーラン(Moulin)通りドイツ人中央ビューロの経営者。」[A, 1, b] フランス人レイノーという名が出ているのは、多分フランス人の名前の方が有利であるということからであろう。実際にはベルンシュタインが経営者であったが、その後の手続きはすべてレイノーと内務省との関係で行われている。内務省は『フォアヴェルツ』の登録について訂正を求める。「サントノレ街149番のアレキシ・レイノー氏。あなたは『フォアヴェルツ』という名でパリで出版しようとされるドイツ語で書かれるものの出版に関連して宣誓をなさいましたが、それは法にかなっておりません。従って1828年7月法によって命じられた形式を規則的に執行するために印紙を貼付け、書類を2部付けて本省(出版局)に提出されるようお願いいたします。もしこの新聞の出版に協同経営者がいる場合、宣誓は会社の株主や出資者以外のすべての所有者によってなされなければなりません。」[A, 1, b] 1844年12月20日再度レイノーは内務省に書類を出す。「1828年7月18日の法と項目の最後のパラグラフを実行するにあたって、下に署名するパリ、サントノレ街149番のアレキシ・レイノーは当法の第1項に命じられた資格条件を合わせ持っておりまして、1月1日から週2回(水曜、土曜)発行され、ポール・レヌアール氏によってギャランシエール(Garancièrre)街で印刷される『フォアヴェルツ』という名の非政治的定期刊行物の唯一の所有者として出版する意志があることを宣誓します。」[A, 1, b]と書き、彼が単独の所有者であり、『フォアヴェルツ』が非政治的新聞であることを強調する。しかし、実際には『フォアヴェルツ』は非政治的新聞ではなかったし、実質的な経営者もレイノーではなかった。非政治的と言うのは、保証金の額を下げてもらうために意図したともとれるが、スパイによる報告から見て、すでに危険な政治新聞になることは大方予想されていたから必ずしもそうであったわけではない⁽⁹⁾。内務省は経営者がフランス人であることを気にかけていたのであろう。やがて内務省から検事総長にこの申請書は上げられ(12月29日)ていく[A, 1, b]。しかしここには保証金をいくら支払ったという記述がないことに注意しなければならない。この未払いこそ廃刊の直接の原因となってくるからである。

申請書に同封されていた宣伝文を見ると『フォアヴェルツ』の内容が明確になる [A, 1, b]。当初の段階では、申請書が言っているように政治色は少ない。「我々のプログラム、我々の傾向、我々の新聞の成立理由は、新聞の中にあるたった一つの重要な言葉『前進』(フォアヴェルツ)というタイトルにある。」「フォアヴェルツは我々の時代の解答であり、個々の人々、民族の合言葉であり、政治の中でも、前進と言われ、社会学説の中でも前進と言われ、科学、芸術、文学、商業、産業で前進と言われている。」「我々の新聞は、政治的、教会的、哲学的、文学的、音楽的どの党派にも属さない。いわんや神にも関係していない。自由独立である。」 [A, 1, b] このことは予想される記事の細目を見ても理解することが出来る。記事の多くは、フランスやドイツの文学や音楽の紹介であった。しかし、実際には、徐々に政治的色彩が強まっていく。

新聞の編集者は事実上ベルンシュタインであった。彼は表面的には現われなかったが、彼が責任者であることは、すでに共同編集者であったボルンシュテットによってドイツに報告されていたものと思われる。ベルンシュタインの回想録 [E, 6] によって当時の彼の状況を分析してみよう。1805年ハンブルク (Hamburg) で生まれたベルンシュタインは、様々な職業を転々としていた。さきの『フォアヴェルツ』の登録の際『アウグスブルク・アルゲマイネ新聞』の編集者と書いたのは、1841年アウグスブルクへ行き、そこでその新聞の通信員になっていたからである [E, 6, S. 288]。しかし1842年パリにやって来たときの彼の職業は80人からなる劇団の長であり、演劇評論家であった。そこで彼はパリのオペラ・演劇を紹介する文章や翻訳をドイツの新聞に書き送っていた。やがてパリのドイツ人の中で有力者と付き合いをもっていたボルンシュテットと知合い [E, 6, S. 302]、ボルンシュテットを通じて当時のパリのドイツ人社交界に潜入していく。音楽家マイヤビーア (Meyerbeer) (1791-1864)、ハイネ (Heine) (1797-1856) やリスト (F. Liszt) (1811-86)、ショパン (Fr. Chopin) (1806-49) とも知合い、音楽、演劇の記事をドイツ各地へ送るようになる。やがて彼は弟のカールとともに、ドイツ人へこうしたニュースを送る会社「ドイツ向け出版、コミッションの中央ビューロ」(Bureau central de commission et de publicité pour l'Allemagne) [E, 6, S. 336] を作り (本社はやがて『フォアヴェルツ』の本社となるムーラン街32番にあった)、企業活動を始める。この会社は翻訳だけでなく、1844年パリ博覧会のための代理店のようなことから、旅行業までを行っていた。こうした活動の一環として彼は『フォアヴェルツ』を企画する。幸いにマイヤビーアが残してくれた金によって『フォアヴェルツ』の設立資金を得ることができた。こうした背景からしても、当初『フォアヴェルツ』が政治と無関係な、演劇、音楽を紹介する新聞を目指していたことは間違いない。しかもドイツの上層部と関係をもっていたボルンシュテットのドイツ人救済協会 (Hilfs-und Unterstützungsvereins für nothliche Deutsches) と関係を持つことによって、プロイセン政府公認の文化広報新聞となる可能性をもっていたともいえる (この協会にはパリのドイツ人貴族が参加していた)。『グレンツボテン』(Grenzboten) (1842-1847) は、『フォアヴェルツ』をパリのプロイセン政府の文化広報組織だと批判していた (1844年, 1^{er} Semestre p. 33 [E, 22, p. 24])。しかし、それにもかかわらずベルンシュタインは政治的な色彩を求めていたとも言える。1844年1月から刊行される記事をも、出版の自由、ドイツの統一といったテーマが中心的に繰り返されている。出版の自由、ドイツの統一といったテーマはドイツにおいては大変危険な政治問題であり、表だって新聞で取り上げることは困難な問題であった。ベルンシュタインが新聞の論調としてこの二つの問題を取り上げたことは、ドイツの諸邦にとって刺激的なことであったに違いない。もっともこのころ『独仏年誌』にとりかかっていたルーゲやマルクスたちにとっては『フォアヴェルツ』のこの方針は些か保守的で興味のない問題に見えたようで

ある。ルーゲは次のように酷評している。「通信員たちによって当地で『フォアヴェルツ』という名の新聞がつけられた。この新聞はかなり悲しむべき状況にある。ドイツのドイツ語新聞よりも悲しむべき状態にある。これらの人々は何の知識も教育もなく、出版の自由の下で、ドイツの兄弟が検閲のもとで書いているのと同じ愚かなことを書いている。」(フライシャー (Fleischer) 宛の手紙, 1844年5月20日, [E, 58, S. 354])。しかし、一方でスパイの報告を聞いたプロイセンの警察は『フォアヴェルツ』を危険な新聞であると考え、保証金未払いによって、また政治的論説を掲げているということによって、廃刊に追い込むことが可能であると考えていた。そのためか、パリのフォン・アルニム (Von Arnim, Alexander) (1798-1861) は、ボルンシュテットの救済協会への寄付を断わってさえる [E, 77, p. 183]。このように相対立する見解の相違は、当時の人々の見解の相違から出てきたものとも言えよう。確かにベルナイスが編集者となるまでの、『フォアヴェルツ』の論調が自由主義であったと言うことは疑いのない事実である。もっともそのことが逆にルーゲ等にとって無意味な新聞とうつり、プロイセンにとっては過激な新聞にうつったということを説明しているのかもしれない⁽¹⁰⁾。次に6月までの『フォアヴェルツ』の状況をみていこう。

b. 『フォアヴェルツ』の1月から6月までの内容

1844年1月2日火曜日に『フォアヴェルツ』の1号が出版される⁽¹¹⁾。冒頭の論文は「様々な危機の前でドイツは何をなすか」(Was thut Deutschland vor allem Noth?)で、出版の自由、裁判の公開を求める論文であった。発刊の理由としてパリに住む8万人のドイツ人には、支援協会も⁽¹²⁾、読書クラブも、雑誌も存在しないからであると書かれてあった。さらに「汎ドイツ主義」という論文が続き、そこでドイツの統一が語られていた。また急進的な新聞として『マンハイム夕刊新聞』(Mannheimer Abendzeitung)、『トリーア新聞』(Trier'sche Zeitung) [E, 5]、(『トリーア新聞』については [E, 74, pp. 169-182] を参照) などもあげられていた⁽¹³⁾。こうした紙面の内容からみて、『フォアヴェルツ』は自由主義的論調を持つ新聞であったということが分かる。

以下6月までの新聞の論調を追って行くと一つの傾向が分かってくる。まず第一に出版の自由と言うテーマが一貫して流れていることである⁽¹⁴⁾。1月25日7号では『新出版法』を取り上げ、全文を掲載している。その主旨は、出版の責任を義務づける(3条)、責任表示のないものは販売を禁止する(4条)、法に許されない表現は禁止される(8条)といったものであった。1月18日の5号では検閲の批判を行い、2月17日の14号ではフリードリッヒ4世 (Friedrich IV) (在位1840-61) と関連した検閲批判を行っている。そしてベルンシュタインは2月28日17号の記事の中でプロイセンがいかに言論を弾圧しているかを掲げて、出版への弾圧を批判している。4月27日34号では、ドイツにおける出版の規制に関する歴史を取り上げ、出版への弾圧の起源は1505年の教皇アレキサンデル (Alexandre) 4世に始まることを指摘し⁽¹⁵⁾、1824年8月19日の法令によって出版への弾圧は頂点に達したことを説明していた。しかし、こうした些か単純な出版の自由への要求も4月を過ぎるあたりから少なくなってくる。そしてむしろ徐々に出版の自由への根本的な問題へと論調が進んでくる。

次にこの時期を特徴付けるものとして、ドイツの統一に関する記事が多いことがあげられる。2月7日11号ではドイツ人という概念についての次の話が展開されている。レヌアールの本屋でドイツ人らしき人にドイツ人ですかと聞いたところ、私はローベンシュタイン人 (Lobensteiner) ですと答え、それではドイツ人ですねと念を押すと、その人はああそうですねと答えたという話であ

る。この記事の執筆者は、この時の印象からわがドイツ人にはドイツ王国もないし、ドイツ軍もなく、ドイツ国民の旗もなく、あるのはドイツ語という言葉だけであることを再確認し、ドイツの統一は切実な問題であることを主張している。

それでは、この二つの論調は、7月から侵入してくることになる社会主義、共産主義の論調に対して当時どう反応していたのであろう。具体的には、それは社会主義、共産主義への批判という言葉をともなって現れてくる。その現れの一つは、『独仏年誌』への評価であり、もうひとつはベルンシュタインの共産主義に対する批判であった。ベルンシュタインは2月3日10号でアウグスト・ベッカー (August Becker) (1812-75) を引用するニューヨークの『ドイツ・シュネルポスト』 (*Deutsche Schnellpost für Europäische Zustände, öffentliches und sociales Leben Deutschlands*) を使って批判する。——共産主義はひとつの新しい現象となっているが、それらの思想は中世の農業者や、バブーフ (Babeuf) (1760-1797)、サン・シモン (Saint-Simon) (1760-1825)、フーリエ (Fourier) (1772-1837) の考えていた夢以上の何物でもない。こうした労働の台目的組織は達成されるのであろうか。私はそうは思わない。——こうした共産主義への批判は、ドイツにおける革命への期待感を否定することにも現れている (1月20日6号)。ドイツでは革命は起こらないという記事の中では、ある青年ヘーゲル主義者が予言した10年以内に革命が起こるであろうという予測に対して、「30年間は無理である。党はどこにいる？ 思想はどこにある？」と疑問を投げかけ、当分ドイツでの革命は期待できないから、当面はドイツの出版の自由、裁判の公開、産業保護を期待するだけでいいと主張している。こうした保守性はボルンシュテットが創設した「ドイツ人救済協会」との関係を見るとよくわかるであろう。

c. ボルンシュテットと「ドイツ人救済協会」

ボルンシュテットという人物には疑問が多い。彼がプロイセンのスパイであることは当時ある程度知られてはいたようであるが、『フォアヴェルツ』を去ったのち、今度はブリュッセルでマルクス等とともに『ドイツ・ブリュッセル新聞』 (*Deutsche Brüsseler Zeitung*) (1847-1848) [B, 2] の編集者となったということは、当時多くの者がはたして本当に彼の実体を知っていたのだろうかという疑問を残すことにもなっている。彼がスパイであることについては、すでにハイネが感じ取っていたようである [E, 34, S. 201]。さらにボルンシュテットとともに『フォアヴェルツ』を編集していたベルンシュタインの方も彼がスパイであることを薄々感じ取り、1844年10月10日に匿名の通信記事を書き、そのなかでボルンシュテットは『フォアヴェルツ』を去った後プロイセン大使館と組んで、『フォアヴェルツ』を攻撃したことを取り上げ、彼を信じつつも彼がフランス政府、プロイセン政府のまわし者であることを疑っていた [E, 34, S. 203 ff.]。

しかし実際に彼がプロイセンのスパイであったことは、現在ではスパイの報告書より明らかとなっている [E, 1, Bd. 2, S. 88, 1845年2月22日の報告]。ただ1847年に『ドイツ・ブリュッセル新聞』を編集していた時もお彼がスパイであったかは明確ではない [E, 42, S. 173]。

ボルンシュテットは『フォアヴェルツ』誌の中で主としてドイツ人救済協会の仕事を行う。この協会はパリに住む貧しいドイツ人たちを基金によって救うと言う主旨を持ったものであった。1月13日の4号で初めてその概要が紹介されている。その後、協会関係の記事は常設となり、毎号多額の寄付をするドイツ人社交界の著名人の名が掲載されるようになる。この名簿を見る限りでも、ボルンシュテットがいかに多くのプロイセンの有力者と関係を持っていたかが分かる。

2月8日8号の『フォアヴェルツ』には設立の主旨と入会案内が書かれている。この協会の設立者は、ボルンシュテット、ベルンシュタインおよびケーラー（Köhler）男爵であり、入会希望者は『フォアヴェルツ』か、出版者レスアールか、ボルンシュテット自身の住所に申し込めばよいことになっている⁽¹⁶⁾。2月10日10号には具体的な主旨が掲げられ、仕事がなく生計の力がない者にパンや肉を与え、貧しい職人や病人を助けたり、お金を貸し付けたりすることがその主旨とされた。会費は年25フランで、200フラン以上納めれば永久会員となった。この額を見ると、会員となるものの多くはパリのドイツ人の中でも裕福なものたちであったことがわかる。ボルンシュテットは、この救済協会と『フォアヴェルツ』を使って、ドイツ人職人の間に芽生えつつある共産主義を調査し、かつ貧しいものへの援助によって共産主義への感染を阻止するという使命を担っていたものと思われる。ベルンシュタインもこの会の執行委員となっているが、彼は5月頃この協会と手を切ることになる。それが分かるのは5月にドイツ人救済協会の本部が『フォアヴェルツ』の住所を離れ、別の所に移動するからである。それと同時にボルンシュテットとベルンシュタインの仲も変化し、ベルンシュタインの方は、『フォアヴェルツ』で批判したはずの『独仏年誌』派の人々に近づいていく。『独仏年誌』派の人々は7月に編集部に入ってくるが、これは『独仏年誌』が1、2号合併号で廃刊となり、その編集者ルーゲとその他の人々が対立するようになったからであった。対立派の人々は、マルクス、ベルナイス、ヘルヴェーク等であるが、彼らは自らの意見の発表の場を求めて『フォアヴェルツ』に乗り込む。しかもその中には「正義者同盟」（Vereins der Gerechten）のひとつも入っており、『フォアヴェルツ』は次第に共産主義への傾向を強めていく。『独仏年誌』はそうした意味において『フォアヴェルツ』の変化にとって大きな意味を持つので、つぎに『独仏年誌』を見ていくことにする。

iii) 『独仏年誌』と『フォアヴェルツ』

a. 『独仏年誌』の人々

アーノルト・ルーゲが編集する『独仏年誌』⁽¹⁷⁾が出たのは1844年2月であった⁽¹⁸⁾。すでに『独仏年誌』の刊行についてはドイツ諸政府の知れるところとなっていた⁽¹⁹⁾。1843年5月には、マルクスが参加して『独仏年誌』が発行されることが報告されていたし [E, 1, Bd. 1, S. 224]、パリで刊行されることについては1843年10月26日に報告されていた [E, 1, Bd. 1, S. 248]。そのため『独仏年誌』のドイツへの輸送は最初から困難が予想されたといっているであろう。1月18日に出されたドイツ語圏外の出版物に対する規制 [E, 22, p. 85f] によって、一層試練の時を迎えることになった（2月25日のスパイ報告でも『独仏年誌』の困難が伝えられている [E, 1, Bd. 2, S. 23]）。ルーゲはおそらくそうしたドイツ側の過剰な反応がフランス政府への圧力となり、『独仏年誌』の禁止へと発展するのではないかと恐れ、2月29日にパリの区役所にフランスへの帰化申請書を提出したのである⁽²⁰⁾。

フランスへの帰化が認められれば、それがもつ意味はかなり大きなものであった。現に1845年にルーゲ、マルクス等に追放命令が出された時、すでにフランス人であったハイネは追放のメンバーから除外されていた。ルーゲ自身もこのとき、この帰化について「しかし、ハイネは帰化しているので追放にはならない」（1月26日母宛の手紙 [E, 58, S. 391]）と嘆いている。彼の帰化申請書を見ると次のように書かれてある。「1844年2月29日木曜日、パリ10区長の前にヴァノー（Vaneau）

街に住む哲学博士アーノルト・ルーゲが現れた。彼は1802年9月13日ベルゲン (Bergen) (ブルゲン島) にプロイセン王国イアマントのブラエケ (Braeke) 公の密使クリストフ (Christoph) ・アーノルト・ルーゲと、その妻ゾフィー・カテリーネ・ヴィルカー (Sophie Katherine Wilker) の息子として生まれた。彼は1843年からフランスへ住み、そこに暮らす意図をはっきりと持ち、帰化証明とフランス人としての市民権を得るために、王国の法、秩序を守り、地方税を支払うことを宣誓した。——」[A, 3, c]。この2月29日という日は、『独仏年誌』の発行の日に近い。ルーゲは初めからプロイセン政府の弾圧を予測し、自らフランス人になろうとしたのではないであろうか。ルーゲがここまで『独仏年誌』に思い入れをしていたとすれば、マルクスとの不和はまだこの時期にはなく、編集上の不満もそれほど顕在化してはいなかったと思われる。実際にはルーゲの帰化は実現しなかった(その理由について筆者は今の所つかめていない)。そのことは、1845年フランス政府によって彼に追放処置が与えられたこと、彼が1844年10月6日にザクセン (Sachsen) の市民権を獲得したいと述べ、もはやフランスの市民権を取ろうとしたときの状態にはないと母に語っていることから分かる [E, 58, S. 365]。当時の市民権の獲得はそんなに簡単なものであったのであろうか。その他の帰化申請書を見ると、2月2日、4月14日に2人のドイツ人が帰化申請書を出している程度でその数は少ない [A, 3, b]。むしろポーランド人の割合の方が高いと言える(この数字はセーヌ県の資料 [A, 3, b]、とパリのアルシーヴ・ナショナルの資料 [A, 1, f] のみから判断している)。

ルーゲが『独仏年誌』にこれほど力を入れていたこと背景には、彼がスイスでの出版を諦め、フレーベル (Fröbel) (1805-93) とともに出版活動の本部をパリで組織しようとしていたことがあげられる。スパイはこの動きについて、フレーベルがパリで交わした契約によってパリが中心地となり、その目的はパリでのプロパガンダにあると書いている [E, 1, Bd. 2, S. 21]。

もともとルーゲがパリに出版の基地を作ろうとしたのは、1843年1月に『ドイツ年誌』(*Deutsche Jahrbücher für Wissenschaft und Kunst*) (1843) が廃刊に追い込まれ、スイス、ブリュッセル、ストラスブール等適当な出版場所を物色した結果、パリが最適であると判断したからであった。1843年夏パリに着いたルーゲは興奮して「ヨーロッパ史はパリの歴史と結び付いている」「ドイツにとってパリはすこぶる重要である」[E, 59, S. 58]と書いていた。パリに着いたルーゲは、フランスとドイツの知的交流を目指して、フランスの知識人を訪ねる(この点に関して [E, 36] [E, 51] [E, 79] を参照)。その中には予定されていただけの人々も含め、ラマルティーヌ (Lamartine) (1790-1869)、ルイ・ブラン (Louis Blanc) (1811-82)、コンシデラン (Considérant) (1808-93)、ラムネー (Lamenais) (1782-1834)、カベール (Cabet) (1788-1856)、デザミ (Dézamy) (1808-50)、ジョルジュ・サンド (Georges Sand) (1804-76)、ルドリュ・ロラン (Ledru-Rollin) (1807-74)、フローラ・トリスタン (Flora Tristan) (1803-1844)、ルルー (Leroux) (1797-1871)、プルードン (Proudhon) (1809-65) [E, 36, S. 17-23] (それらの社会主義者はすでに1842年に出たシュタインの本 (*Der Communismus und Socialismus des heutigen Frankreichs*, 1842, (Goldsmiths'-Kress 33082) によってすでにドイツでは知られていた名であった)²¹⁾ などがいた。しかし、フランス側の人々からの協力はえられなかった(12月にフランス人抜きの可能性が出る)(ルーゲからマルクスへの12月1日の手紙 [D, 5, S. 422])。特にフランス側との意見の不一致の原因は、フランスの共産主義が宗教と結び付いていたことであった。ルーゲは、フランス人と交渉を取りつつ、パリのヘス (Hess, M.) (1812-75) をつうじてハイネ、ベルナイスと連絡を取る。他方でオステンデ (Ostende) にいるヘルヴェークを通じてエンゲルスと連絡を取りドイツ側のスタッフ

を固めていく⁽²²⁾。これらの人物の参加によって、プロイセン政府は警戒の念を強める。1843年10月になると、プロイセンのビューロー（Bülow）（1792-1846）のもとに『独仏年誌』の刊行のニュースが伝わる [E, 1, Bd. 1, S. 248]。

この『独仏年誌』は、プロイセン政府による弾圧だけでなく、さらに二つの困難を持っていた。その第一は財政的困難⁽²³⁾、第二は内部の対立であった。財政的困難は最初から予測されていた。ルーゲは当初資本を株式の発行によって賄う予定であったが、フレーベルはルーゲの資産を当てにして、その方法を採用しなかった⁽²⁴⁾。こうして『独仏年誌』は出版と同時に資金のメドがたたなくなるという事態に陥ってしまった。ルーゲははっきりと「この全企画の状況の悪さは主として資金不足と私の不在にある。」（ルーゲは12月にドイツにいた）（1844年5月13日フォイエルバッハ宛の手紙 [E, 58, S. 343]）と語っている。印刷の方は、そうした資本の不足とフランス側の返答待ちということもあって、11月までは印刷されなかった（マルクスからフレーベル宛の手紙 [D. 5, S. 61]）。しかし、ルーゲが12月にドレスデン（Dresden）から帰り、病気になるという悪条件の中で印刷は進められる。「第1号が現れた時私は病気であり、ほとんど12月以来関与することが出来なかった。」（1844年3月28日母宛の手紙 [E, 58, S. 341]）と書いていることがそれを示している。『独仏年誌』はルーゲにとって不満足な形で出現したのであった。その理由としてはフレーベルとの資金上のトラブルだけでなく、マルクスとの編集上の対立も考えられるが、それはまだ明確ではない。むしろ『独仏年誌』の執筆者選びをリードしていたヘルヴェークとの対立も考えられよう。

ヘルヴェークとの対立は、当時の状況下でのヘス、マルクス、エンゲルスとの対立という側面を伴っていた。ヘルヴェークは交流が広く、エンゲルスや、ヘスなどの『独仏年誌』の主要論客だけでなく、モイラー等社会主義者とも深く関わっていた。すくなくとも、『独仏年誌』について、パリのヴァノー街でヘルヴェーク、モイラー、ルーゲ、マルクスは編集会議を何度か開いたはずであるが、12月にルーゲがドイツに旅行し、パリに帰って以後病気で倒れたとき、ヘルヴェークとマルクス等のグループはルーゲと対立していく。このグループはやがて7月になると、『フォアヴェルツ』に進出することになる。

b. 『独仏年誌』への評価

『独仏年誌』1, 2号合併号は創刊号で最終号という運命を持って3月7日に店頭に並ぶ。推定印刷部数は1,000冊 [E, 7, p. 64] から3,000冊 [E, 77, p. 176] で、その多くがドイツへ送られた。ベルナイスの3月1日の手紙によると、すでに、この段階でドイツへの輸送は困難を極めていた。特に、ベルリンの内務大臣アルニム（Adolf Heinrich）（1803-68）（アルニムは2人おり、ここではパリのアルニムとベルリンのアルニムという形で区別する）はハイネの詩が、スキュンダルを暴いていること、ヘルヴェークの詩がプロイセン王への裏切りを示していること、マルクスの「法哲学批判序説」がドイツの革命を想起させるものであることなどを挙げて、『独仏年誌』に厳しい注意を与えた。こうした報告をうけたプロイセン政府は3月23日に内務省を通じて全知事に『独仏年誌』の没収を命令する [E, 77, p. 178]。4月16日に内務大臣アルニムは『独仏年誌』に関係したマルクス、ルーゲ、ベルナイス等が国境を越えて侵入した場合、すぐに逮捕せよという命令を出す [E, 2, S. 43]。しかし、それにもかかわらず『独仏年誌』は、フランスにいたドイツ人によってだけでなく、またドイツ内でもよく読まれていた。『独仏年誌』の刊行直後の3月2日には『フォアヴェルツ』（18号）は、書評を掲載した。3月2日と9日（20号）の2回、『独仏年誌』に関する記

事が出ている。『独仏年誌』は、『ドイツ年誌』『ライン新聞』(*Rheinische Zeitung*) (1842-1843)に続く雑誌で、検閲に抵抗した雑誌の系列として高く評価され、『フォアヴェルツ』も検閲の自由を望む点については同じであると書く。しかし論調的には必ずしも好意的ではなかった。3月9日の記事ではかなり厳しい批判へと変わっている。『独仏年誌』創刊号についてわれわれの全体的評価を言うと、この本はたんにわれわれの期待を裏切ったというだけでなく、そこまで到達していないということである。」と厳しいコメントを付けた後、評者が個々の論文について個人的なコメントを付け加えていく。ルーゲが序で語る出版の自由は、『フォアヴェルツ』にとっても重要であり、ハイネの「賛美歌」は、闘争家ハイネの歌であると高く評価している。そしてマルクスの「法哲学批判序説」には鋭い弁証法と知的な批判分析があり、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」は、非常にしっかりした論文で、こうした論文は、『フォアヴェルツ』の語りえない内容を持つと絶賛している。また、エンゲルスの「イギリスの状態」、マルクスの「ユダヤ人問題」とベルナイスの新聞批評も高く評価している。しかし、『フォアヴェルツ』としてはもっと「期待していたが期待はずれであった」と書いて、全体的には不満であると付け加えている。しかし、いずれにしても、『独仏年誌』は『フォアヴェルツ』にかなり大きなインパクトを与えていたと思われる。それはその後の『フォアヴェルツ』に『独仏年誌』からの引用が増えて行くことによって分かる。

そのほか、ルルーの編集していた『ルヴュー・アンデパンダンテ』(*Revue Indépendante*) (1841-1848) [B, 4] も、『独仏年誌』に関するパスカル・デュプラ (Duprat) (1816-85) の書評を掲載した⁽²⁵⁾。しかしこれは『独仏年誌』の発刊前 (1844年2月25日号) に掲載されたもので、読後の書評ではなかった。そのためパリの「ヘーゲル学派」と書かれたこの書評は、ルーゲの『ハレ年誌』(*Hallische Jahrbücher*) (1838) 『ドイツ年誌』『ライン新聞』の変遷を辿り、『独仏年誌』にいたる経過を示している。しかし、本来まだ出版されていないはずの『独仏年誌』の内容に突き進んでいく。もっとも言及しているのはルーゲの冒頭の論文だけについてであるが、おそらくこの書評の著者は他の著者の作品を知らなかったのではなかろうか。つまりこの書評の著者は、『独仏年誌』内に起きていたルーゲとの対立見解を知らなかったのではないであろうか。その中身は実際の『独仏年誌』の内容とだいぶ食い違っているので大変興味深い。例えば、書評の著者はルーゲがフランスとの連合を強調する点をあげる。しかし、実際には12月の段階でフランス側からの支援は得られなくなり、『独仏年誌』はドイツ人側からのみの雑誌となっていた。しかも『独仏年誌』が1, 2号のみで廃刊したことを考え合わせるならば、『独仏年誌』の意図したフランスとの連合は、結局ルーゲの個人的意志の上で挫折してしまっていたのかもしれない。こうした論調が中心となったのは、この書評が同誌の前号 (1843年11月10日号) に書かれていたルイ・ブランの「ドイツとフランスの知的連合について」と関係していたからかもしれない。しかしその中で、ルイ・ブランはドイツとフランスの知的連合は、お互いに目的の違いがある以上無意味であるとしていたのであるから、その論旨を受けたという点では、かなり矛盾していると言うことになる。ルーゲの序文は『独仏年誌』の中でもかなり異質であっただけに、フランスの知識人との関係においても異質とならざるを得なかったのかもしれない。従って、『ルヴュー・アンデパンダンテ』の書評はその発刊日が『独仏年誌』の刊行の日と同じであったという不思議さだけでなく、内容が、フランス側からも、またその他の執筆者側からも離れたものであったという点において、『独仏年誌』内のルーゲの立場を象徴していたといえよう。結果的にはルーゲ以外の人々が意図していた共産主義的思想の方が、プロイセンの役人の目に止まることになった。しかも『フォアヴェルツ』においてさえ、そうした論文の方が高く評価されていた。こうして、ルーゲは、フレーベルに対しては金銭上の問題で対

立し、ヘルヴェーク等とは思想上の問題で対立し、孤立化していく。そして、ルーゲとヘルヴェーク等の共産主義者が決定的に対立するのは、『フォアヴェルツ』での記事においてである。6月19日49号に、ルーゲは、ニューヨークの『ドイツ・シュネルポスト』への質問状を發表する。それは、『ドイツ・シュネルポスト』が『独仏年誌』に対して行った批判に答えるものであった。『ドイツ・シュネルポスト』は1844年5月4日号で「ヨーロッパの現状について」という『独仏年誌』への書評を掲載した [E, 22, p. 35]。この書評は、『独仏年誌』がバヴァリア (Bavaria, Bayern) の王や、フリードリッヒ3世 (在位 1797-1840) や、王子夫妻や、宗教、私的所有に対して、大逆的な罪を持った論文を載せていると批判していた。しかもその攻撃はいささか下品であった。それに対しルーゲは、まず第一にこの記事を書いた通信員はヘーゲル (Hegel) (1770-1831) やヘーゲル主義者に対してまったく無知であること、シュトラウス (Straus) (1808-74) やバウアー (Bauer, B.) (1809-82) やフォイエルバッハ (Feuerbach) (1804-72) 『ドイツ年誌』『ライン新聞』についてもまったく無知であることを批判する。そしてアメリカではドイツで行われているような非人間的状況を批判するものはないのかと問い詰め、社会が労働を組織するのは人間の名によってであり、所有の名によってではないと答える。ルーゲはドイツでは人間は奴隷状態であり、人間的状態など存在していないと批判し、『独仏年誌』はまさにこの点を批判したのだと反批判する。

ところが、『フォアヴェルツ』の編集者ベルンシュタインは、6月22日50号でこのルーゲの質問状に対する論争を広く一般に喚起し、読者に批判の機会を与える。この機会に乗じてベルナイスや、マルクスが入り込み、ルーゲの反批判そのものが批判を受けることになる。基本的には、ルーゲの人間主義に対して他の『独仏年誌』の執筆者が賛成できなかったのがその第一の原因である。7月3日53号のベルナイスの『ドイツ・シュネルポスト』への批判は、ルーゲと基本的な点で違っている。それは、所有の弊害と自由競争の弊害を指摘し、法の前の平等を批判していた。そして私的所有を一般的所有に変えることがその解決策で、貨幣を廃棄することも考えられていた。おそらくこのベルナイスの思想には、すでに編集に関係していたベルナイスを支援していたマルクスの経済学の知識、それもスミス・ノート段階、第一草稿段階の影響があったのだろう⁽²⁶⁾。

ルーゲは7月頃さらに批判を続ける。そこで、ルーゲは7月6日54号の論文で先にベルンシュタインが述べた批判、すなわちルーゲの人間主義とマルクスの「ユダヤ人問題」の人権批判が矛盾するという批判に対して、それらは基本的には同じものであると答え、マルクスと立場は同じであることを強調する (しかし、この時ルーゲはマルクスと同じアパートでの同居をやめ、私的にも対立するに至っていた)。しかも、マルクスの論理があたかも自分の考えと同じであるかのごとく、マルクス氏の考えを参照せよと述べ、「ブルジョワ社会の揚棄は人間社会を通じてのみなされる」という抽象的な言葉を出してくる。マルクスはもちろんこの時ルーゲ批判が可能であったはずであった。しかし彼が実際にルーゲ批判をするのは、7月末 (7月24日59号、27日60号) にルーゲがシレジア (Silesia, Schlesien, Śląsk) 織布工の一揆に対してプロイセン政府の慈善を歓迎したときであった。

ルーゲとその他の『独仏年誌』の執筆者たちとの対立の顕在化は『フォアヴェルツ』誌上で7月にはっきりとするが、すでにその対立は『独仏年誌』刊行直後から進行していた。すでに5月ルーゲはフォイエルバッハ宛に「しかしマルクスはジャーナリストとして完全に墮落している」(5月15日) [E, 58, S. 343] と批判していた (ルーゲはマルクスが『国民公会史』を書いていることだけは知っていたが (1844年7月9日の手紙) [E, 58, S. 362])⁽²⁷⁾。もっともその間マルクスはジャーナリストとしての活動から離れていたため、この批判は当たっていない。しかも通説ではその間マルク

スは経済学の勉強をしていたことになっている。ただこの経済学の成果が最初に現れるのは、ベルナイスやヴェーバーのそして自らの『フォアヴェルツ』誌上の論文であることに注意しておかねばならない。マルクスは、この3月から6月にかけてルーゲから離れつつあった間にまとめた経済学の知識をもとに、ベルナイスが編集に従事する『フォアヴェルツ』へ移り、そこでその成果を発表することになったのだから。

(2) 『フォアヴェルツ』の変化

i) ベルナイスの編集への参加

『フォアヴェルツ』は7月をもって編集者がベルナイスに代わることになる。この交代の原因はベルンシュタインが共産主義者に門戸を広げようとしたことだけでなく、財政的問題でもあった。

すでに述べたように『フォアヴェルツ』の価格は労働者にとっては高く、しかも新聞の記事には演劇やサロンの紹介が多く、購読者の対象は上層階級であった。その上層階級は逆にフランス語の新聞を読むのが普通であった。そのため、財政的困難は進んでいったが、その解決策として『独仏年誌』のまわりにいる富裕な(?)一団が狙われることになった。ベルンシュタインは、彼らの記事によって労働者階級の注意を引くことと、財政的支援を受けるという一石二鳥を考える。ベルナイスはベルンシュタイン宛の手紙でそのことについて述べている(1844年夏(Hochsommer)) [E, 32, S. 96]。そこで彼は、ルーゲも我々も『フォアヴェルツ』を支援する金を持っていないので、多分金を持っているであろうハイネに頼んだ方がよいと答える。ベルナイスは、ハイネに対して10月半ば700フランの金を工面してくれるよう頼むことになる。いずれにしてもルーゲが『フォアヴェルツ』に加わらなかったことは資金的にみて大きな痛手であった。

ベルナイス⁽²⁸⁾は7月3日53号から編集長となる。6月19日49号までの『フォアヴェルツ』の副題『芸術、経済、演劇、音楽、社交生活のパリシグナル』(*Pariser Signale aus Kunst, Wirtschaft, Theorie, Musik und geselligen Leben*)に代わって『パリ・ドイツ雑誌』(*Pariser Deutsche Zeitschrift*)という副題がつくこととなった。

ベルナイスは1815年にマインツ(Mainz)で生まれた[E, 32, S. 85]。彼は、ミュンヘン(München)、ハイデルベルク(Heidelberg)、ハーノヴァー(Hannover)等の大学に学び、ジャーナリズムの世界に入った[E, 32, S. 86]。そして、『マンハイムタ刊新聞』の編集に加わり、『独仏年誌』へ参加した後、『フォアヴェルツ』の編集に携わることになる。すでに『独仏年誌』の論文でプロイセンからにらまれていた彼の参加は、『フォアヴェルツ』へのプロイセンの監視を強化することになった。7月21日の『マンハイムタ刊新聞』には、「パリで出ている『フォアヴェルツ』の編集は今では古いドイツの党派の手から離れ、7月1日以来、ハイネ、ヘルヴェーク、マルクス博士、ルーゲ博士、ベルナイスに代表される党派の手で編集されている。」[E, 2, S. 44]と掲載されている。8月19日のパリからのスパイ報告には、「名目的編集者は、フリッツ・ベルナイスで——」とある[E 1, Bd. 2, S. 48]。このように編集の変化はすぐにプロイセンの知るところとなっていた。

プロイセンやザクセンはすぐに『フォアヴェルツ』の共産主義に対して対処しようとする。まず第一に動きを牽制すべく、『ドイツの水先案内人』(*Deutsche Steuermann*) (1844-1846) という新聞をパリで作らせる。この新聞は明らかに『フォアヴェルツ』を意識したもので、『フォアヴェル

ツ』の社主ベルンシュタインが経営していたドイツ中央ビューロに対して、ゲルマン中央ビューロを組織し、対抗心を丸出しにしていた。しかもその資金はプロイセン大使館から出ている [E, 22, p. 242]。第二の政策は外交ルートを通じて『フォアヴェルツ』を廃刊に追い込むという政策である。7月15日には、ザクセン州知事は「パリで出ている『フォアヴェルツ』の最新号は、その著者に対して刑法上の逮捕を導入しうる論文をいくつか含んでいる」と書き、フランス政府へ働きかける機会を狙うことになる [E, 2, S. 44]。

しかし状況を一変させたのがフリードリッヒ4世に対する暗殺未遂事件であった。この事件には、シレジア織布工の一揆、さらにはトリニアで夏におこなわれた聖衣巡礼等が関係していた。『フォアヴェルツ』弾圧への経過は(3)の「『フォアヴェルツ』への弾圧」で述べるとして、7月から12月までの『フォアヴェルツ』の記事の内容を追うことにする。

ii) 7月後の記事の内容

『フォアヴェルツ』の記事はすでにルーゲが質問状を送ったときから急進的になっていた。そこでは『独仏年誌』の評価をめぐっての記事から、社会、経済問題に関する急進的な記事が載るようになっていった。7月以降記事を書いた主要なメンバーは、ベルナイス、マルクス、G. ヴェーバー、モイラー、ベッカー、ビュルガース (Bürgers) (1820-78)、エヴェルベック (Ewerbeck) (1816-1904)、W. マール (Marr) (1819-1904)、ヴォルフ (Wolff) (1809-60)、エンゲルス等であった。彼らは共産主義的論文を書く一方、新聞の拡大にも努力する。8月には、『アウグスブルク・アルゲマイネ新聞』の販売網を通じてドイツへ広げようとした (しかし、9月になると『アウグスブルク・アルゲマイネ新聞』とは対立する)、イギリスからドイツに移ったエンゲルスも販売作戦を展開する。こうした展開は併せてドイツ国内における共産主義のオルグ活動とも関係していた。したがって新聞の内容もそうしたものが多くなる。この時期の新聞の記事を特徴づけるものは、社会問題への関心 (シレジア織布工の一揆)、反プロイセン (フリードリッヒ4世暗殺未遂事件)、神秘性への批判 (トリニア聖衣巡礼) であった。以下それぞれの内容についてみていく。

まずシレジア織布工の一揆であるが、シレジア織布工の一揆に関する最初の記事は、6月30日52号の簡単なニュースは別として、7月6日54号の「リーゼンゲビルゲ (Riesengebirge) の織布工」、7月10日55号のハイネの「貧しき織布工」(Die Armen Weber)、7月13日56号の「プラハから」であった。その後、次々に関連記事が出る。記事の内容は、シレジア織布工の一揆を報告するものと、その根本的原因、対策を展開するものとの二つに分かれていた。実際にシレジアで一揆が起こったのは、6月4日から6日にかけてであった。その連絡がパリに伝わるのは、『フォアヴェルツ』の記事よりも当然早かった。すでに『レフォルム』(La Réforme) (1843-1850) (6月17日) や、『デモクラティエ・パシフィック』(Démocratie pacifique) (1843-1851) (6月16日) が織布工の一揆の様子を記事にしていた。1ヶ月もニュースが遅れた原因は、ルーゲとベルナイスとの理論闘争の最中であったということもあるが、『フォアヴェルツ』の編集方針の変更が徹底するのに時間がかかったためであったように思われる。また記事の内容の多くが、かなり理論的な分析に向けられていたからでもあったのであろう。織布工の一揆そのものは、6月4日ランゲンビエラウ (Langenbielau) とペテルスヴァルダウ (Peterswaldau) の織布工たちが、ツヴァンツィーガー (Zwanziger) 兄弟の工場の前で抗議をしたところ、守衛に発砲され、警察に逮捕されたことから始まった⁽²⁹⁾。彼らの要求は賃金の引き上げ、一時金の支払いであったが、それも拒否され、怒っ

た労働者は、ツヴァンツォーガー一家に押し入り家を占拠した。この動きは、プラハやザクセンにも伝わり、大きな抗議運動に変わっていった。これによって一地方の一揆から全ドイツの一揆へと事態は進展する⁽³⁰⁾。これに対し、フリードリッヒ4世は、シレジアの織布工の貧困に対する慈善対策で防ごうとした。

『フォアヴェルツ』の記事は、事件の推移を追うだけでなく、その原因やフリードリッヒ4世の対策までにも迫っていた。事件の推移については、7月6日54号の「リーゼンゲビルゲの織布工」と、7月13日56号の「プラハから」、7月20日58号の「プラハの織布工と印刷工の嘆きと希望」、7月24日59号の「ペーメン（Böhmen）の労働者運動」等がある。「リーゼンゲビルゲの織布工」の中では、かなり具体的に織布工の様子が述べられている。「1844年6月のある日、シレジアのペテルスヴァルダウとランゲンビエラウで54人の織布工たちが手に木材や刀を持って現れ、兵隊に激烈な戦いを挑んだ。そして彼らは、工場の王が住む宮殿を荒し、債務証書や信用状を破り捨てた。」そしてこの事件は「一言でいえば、祖国ドイツ最初の意義ある事件である」とコメントを付け加えていた。「プラハから」の中では、プラハで印刷工が、彼らの賃金を引き下げる役割を果たしていた機械を打ち壊したという状況が伝えられた。さらに、「ペーメンの労働者運動」では、カタストロフ状態になったライヘンバッハ（Reichenbach）の機械打ち壊し運動も報告されている。

こうした事態の成行きに対し、理論的な面からの論評も書かれるようになってくる。具体的にはマルクス、ヴェーバー、ルーゲの論文がそれである。しかもこれらの論文はマルクスの「パリノート」[D, 7]、『経済学・哲学草稿』（以下『経・哲草稿』と略）[D, 4] [D, 6] と密接に関連している点で興味深いものである⁽³¹⁾。

すでにルーゲとの論争の中で、『フォアヴェルツ』の理論的内容はできあがっていた。まず第一に国民経済学への批判、第二にヒューマニズム的改善への批判がそれであった。国民経済学批判については、すでに7月3日53号でベルナイスが、所有の弊害、平等批判、貨幣批判を行い、根本的批判が必要であることをあげていたし、7月20日58号ではヴェーバーも、競争批判、所有批判を行っていた。この二つの論文はいずれも、マルクスのノートや草稿の内容が使われた形跡があり、3人の共同執筆であった可能性もある。一方ヒューマニズム的改善への批判についてはルーゲ批判、人間主義的改善批判となってベルナイスの匿名の論文に現れていた（6月22日50号）。

シレジア問題の理論的展開は7月27日60号に出されるアーノルド・ルーゲの「プロイセン王と社会改革」から始まる。この論文は、シレジアの貧民に対して王の慈善を請うというものであった。それに対して、『フォアヴェルツ』編集部から非難が起こる。編集部は、慈善などというなまぬるい政策は意味がなく、むしろシレジアの織布工の一揆を起こした社会矛盾の批判が重要であると考えていたからである。ヴェーバー（ヴェーバーについては[E, 26] [E, 62]を参照）は8月3日62号に「プロイセンの公的慈善」という論文を書いて、「公的慈善は今日までまだ貧困の拡大を食い止められていない」と断定し、慈善がなんの役にも立っていないことはイギリスの例が良く示しているとビュレ（Buret）の著作[C, 1]を使って厳しく慈善政策を批判している。さらにそれを受けてマルクスは8月7日に『「プロイセン国王と社会改革——プロイセン人」に対する批判的論評』（[D, 1]所収）というルーゲ批判の論文を書く。マルクスは、ルーゲは宗教的信条に厚いフリードリッヒ4世の内閣令を評価するが、社会の危機の方にむしろ目を向けるべきであったと批判する。そして、このシレジア織布工の一揆は王朝に対してではなく、ブルジョアジーに向けられたものであるから、王が蜂起に憂慮するというのはおかしく、それはたんにブルジョアジーとプロレタリアートとの対立を無視したものにすぎず、それをキリスト教的慈善でもって曇らせているだけであると批

判する。こうして編集部のシレジア織布工一揆に関する論理は、ルーゲのヒューマンイズム批判、国民経済学批判となって出現する。この時期の理論的中心人物となるのがマルクスであり、その資料はマルクスの「パリノート」、『経・哲草稿』であったと思われる。直接にはシレジア織布工の一揆に関係していないが、国民経済学批判との関連の中で書かれたヴェーバーの8月10日64号の論文「アルザスのオスターヴァルトコロニー」と、8月23日69号の「貨幣」もマルクスの影響を受けて書かれたものと思われる。「アルザスのオスターヴァルトコロニー」では、現存の私的所有を前提とした理想社会は、結局は崩壊せざるをえないことを暴露し、私的所有そのものを批判する。「貨幣」では、貨幣はあらゆるものの抽象的価値となり、ブルジョア社会の神となっていて、人間の本質を疎外していると批判する。そこに使われる言葉は『経・哲草稿』の第三草稿と類似している。

国民経済学批判は、貨幣という物神への批判であり、それは一方で宗教的神への批判も含んでいる。8月になってフォイエルバッハの『ルターの意味における宗教の本質』[C, 4]からの抜粋の連載が始まる(8月14日63号から)。ここでは、神が永遠となり、人間が無価値なものとなるルターの教義が批判に晒されていた。この連載は10月30日87号まで続くことになるが、この本を『フォアヴェルツ』へ貸与したのは、マルクスであった⁽⁴²⁾。宗教批判はまた8月から始まったトリエアの聖衣巡礼批判となって具体化していた。

トリエアの聖衣巡礼は、8月10日から10月6日までの約50日間にわたってラインプロイセンの街トリエア(マルクスの生まれ故郷一詳しくは[E, 74, pp. 101-107]参照)で開催された。その内容はイエス・キリストが着ていた衣服と言われるものがトリエアの聖堂に保存されていて、それを一般公開するというものであった。プロイセンのトリエアの聖衣巡礼に対する政策的意図は、6月のシレジア織布工の一揆と7月の国王暗殺未遂事件から民衆の目を反らせることであったようであるが、トリエア当局としてはこれはずでに事前に計画されていた行事にすぎず、偶然に先の二つの事件と重なったわけであった。『フォアヴェルツ』は、むしろこの一連の事件の中でこれを取り上げ、理論的にはフォイエルバッハ的宗教批判の観点から批判した。最初に載った記事は、8月21日67号の「トリエアのギムナジウムの生徒からの手紙からの抜粋」であった。「あのてたらめなキリストの聖衣展示以来、トリエアでの生活と雑踏について予想がつかないでしょう。海のような群衆が絶えずあちこちへと動き、昨日は聖衣が展示される最初の日で、多くの人々がその前に集まっていました。」この生徒はトリエアの聖衣の薄汚れた様子を、今日のキリスト教の状況と似ていると結んでいた。その後、ヴェーバーも10月9日81号に聖衣巡礼批判を書く。しかし『フォアヴェルツ』の記事の中で最も重要と思われるものはマルクスの妻イエニー(Jenny)(1814-81)がトリエアから『フォアヴェルツ』へ書き送った8月10日64号の「一ドイツ婦人からの手紙」であろう。これは正確には巡礼前のトリエアの様子を語っている点で他の論文とは異なっているが、やはり巡礼を取り扱った記事の中に入れても良いものであろう。この中の話題はもっぱらフリードリッヒ4世への暗殺未遂事件であるが、一婦人がキリストの聖衣展示に沸き立つ人々の中で、いかにこの事件を受け止めたかということが語られている。国王暗殺未遂事件という神聖なものへの攻撃は、プロイセン国家という神聖が侵されていることを物語っており、プロイセン政府はその汚れをひたすら聖衣巡礼でごまかそうとしていると批判する。

もちろん、この国王暗殺未遂事件も当然『フォアヴェルツ』の記事となって現れていた。しかも国王暗殺未遂事件についてベルナイスが書いた記事こそ(8月3日62号)フランス政府、プロイセン政府を怒らせ、最終的にベルナイスの裁判、『フォアヴェルツ』の廃刊、マルクス等の国外追放を引き起こす原因となったものであった。すでにフランスでは、ルイ・フィリップ王を暗殺しよう

という事件がいくつか起こっていた⁽³³⁾。その中にはケニス (Quenisset) 事件のようにドイツ人が加わっていたものもあり⁽³⁴⁾、フランス政府はドイツ人の動きにかなり敏感になっていた。そこへドイツでの国王暗殺未遂事件が起き、それを『フォアヴェルツ』が評価したことによってフランス政府は厳しい反応を示すことになった。

8月8日62号の記事は「プロイセン王への暗殺未遂事件」という題で、国王暗殺未遂事件についてかなり高い積極的評価を与えていた。まず彼はこの事件を詳細に語る。プロイセン国王が城門の下に馬でやってきたとき、一人の男が馬に向けて銃を撃った。犯人を捕らえてみると彼はチェコ人であった。彼を取り調べた結果、彼の殺人への動機は政治的なものではなく個人的な恨みであった。この事件からベルナイスは次のように展開する。「ドイツ国王暗殺未遂事件はドイツ絶対主義に対する唯一の証である。」「絶対主義はその神聖にして不可欠な本質を失っている。」暗殺が政治にとっていい影響をもたらすかどうかは別として、暗殺は少なくともドイツ国王が神聖不可侵のものであるという神話を覆したことになる。そして人間性というものは、こうした王政を崩したところに始まるのであると結んでいた。この王制批判は当然フランスのルイ・フィリップ体制への批判をも含むことになってしまっていた。8月以後『フォアヴェルツ』はフランス側とドイツ側からのさまざまな弾圧と戦うことになる。

(3) 『フォアヴェルツ』への弾圧

i) ベルナイスの記事への裁判

ベルナイスの記事へのフランス政府の反応はかなり早いものであった。まだベルナイスの記事が発表される前に、『フォアヴェルツ』7月31日61号に国王暗殺未遂事件についての記事が出るが、それを見たプロイセンのパリ大使のアルニムは、7月31日ギゾー (Guizot) (1787-1874) 政府にたいし『フォアヴェルツ』を保証金2万フラン未払いの罪で廃刊に追い込むよう要請する [E, 47, S. 429]。そしてベルナイスの記事が出ると、それをパリのアルニムはベルリンのビューローに報告する [E, 49, C. 192]。ギゾーも内務大臣デュシャテル (Duchatel) (1803-67) に対して「彼らは3人で責任編集者はベルンシュタイン氏、ルーゲ博士、マルクス氏だ」 [E, 22, p. 200] と書き送る。8月20日にはギゾーはアルニムの要求に対して責任編集者ベルナイスへ出版法を適用し、共同編集者ハイネ、マルクスを追放することを考えていることを知らせる [E, 47, S. 430]。その報告をパリのアルニムはベルリンのビューローのもとに19日に送り、マルクス、ベルンシュタイン、ルーゲ、ハイネの追放をギゾーが約束してくれたことを知らせる [E, 49, C. 192]。ちょうど同じ日にギゾーはパリのアルニムに対し、ルイ・フィリップ王 (在位1830-48) はベルナイスを保証金未払いによって告訴する気があり、編集者に対しては国王暗殺未遂事件を支持した罪で追放することを決めたと報告した。ベルリンの外務大臣ビューローは、内務大臣のアルニムに対してフリードリッヒ4世の名で彼らの追放を考えていると説明した。こうしたパリとベルリンとの間の取引の結果、9月10日、ベルナイスは予審判事による召喚を受けることとなった [E, 77, p. 185]。ただ具体的な追放計画の方についてはまだこの時期には不明確であった。10月4日ギゾーはパリのアルニムに会い、追放時期も近いことをもう一度約束する [E, 47, S. 431]。ただこれまで処置が遅れていたのは、ギゾー自身の健康状態が悪かったということと、控訴院長エベール (Ebert) が休職中で、彼と充

分な話し合いがなされていなかったからである。またプロイセン側も編集者の中にハイネが入っていて、彼も追放を免れないのではないだろうかと恐れていた。フランス側にとってもハイネをフランスから追放したとなれば、ギゾーと敵対するルドリュ・ロランやティエール(Thiers)(1797-1877)がそれに反応し、ギゾー政府の崩壊にもつながりかねない問題であった。パリのアルニムはそのことをビューローに伝え、ハイネを追放の枠外におくことを考える。もっともフランスにとってはフランス国籍を持つハイネを追放することは大変なことであった。しかもハイネはフランス政府から金銭的援助をもらって生活していたのだから⁽³⁵⁾。

ハイネと『フォアヴェルツ』との関係はベルナイスやマルクスが参加するより以前からのものであった。しかし、シレジア織布工の一揆とリヨン織布工の一揆(1831, 1834)とを合わせた織布工賛歌「貧しき織布工」(Die Armen Weber)、「ドイツ冬物語」(Deutschland, Ein Wintermärche)[E, 31 所収]、フリードリッヒ 2 世をカリカチュア化した「新しきアレキサンダー」(Der neue Alexander)、「中国の皇帝」(Der Kaiser von Kina)[E, 31 所収]等によって、マルクス等の党派にかなり近づいていた。しかしそのことはもちろんハイネが急進的になっていたということを必ずしも意味していなかった。彼はフランスのプロレタリアートへの同感を持っていなかったし、また逆にルイ・フィリップへの同感もなく、良き王によって統治される社会を望んでいるにすぎないという中途半端な状況であった[E, 45, S. 13]。その点において彼がフランス政府から年 4800 フランもの年金を受け取る理由があったとも言えよう[E, 52, p. 385]。もちろん 1844 年にはこの『フォアヴェルツ』の事件のために当然年金は支給されなかった。

このようなフランス政府の庇護を受けていたハイネを別として、『フォアヴェルツ』に関係したすべての人物がギゾー政府によって追放令の憂き目に会うこととなった。11 月 6 日ギゾーは『フォアヴェルツ』の発行停止と関係者の国外追放という最終決定をパリのアルニムに手渡した[E, 49, C. 193]。

さて『フォアヴェルツ』の廃刊の方だけを見ると、それはベルナイスの裁判に集約されていたともいえる。9 月から何度か審問を受けていたベルナイスは、12 月に求刑を受ける。ベルナイスの裁判については、『フォアヴェルツ』の仲間であり、かつ敵⁽³⁶⁾でもあった『アウグスブルク・アルゲマイネ新聞』がいち早く伝えていた。『アウグスブルク・アルゲマイネ新聞』は 8 月 26 日(nr. 239)に『フォアヴェルツ』がカールスルーエで禁止になったと伝えた後、9 月 24 日(nr. 268)にはパリからの報告として、パリで出ているドイツ語新聞『フォアヴェルツ』は裁判に巻き込まれたと伝えている。その理由として保証金の未払いとプロイセンに対する攻撃があげられている(p. 2134)。編集者ベルナイスがすでに 2 度法廷に立っているということまで書かれていた。そして 12 月 2 日(nr. 337)にはベルナイスについて詳しい記事が書かれる(p. 2694)。たとえば以前カール・ベルナイスと言っていた人物が最近ではフェルディナンド・ケレスティン(Cölestin)と筆名を代えているが、以前には『マンハイムタ刊新聞』などでプロイセンを攻撃していた人物であったことが伝えられていた。当の『フォアヴェルツ』でこの裁判が報告されるのは比較的遅く 12 月 14 日 100 号のことであった。そこでは「昨日ベルナイス氏は軽犯罪裁判所の第 8 号室で告訴された。その理由は『フォアヴェルツ』が政治的の新聞であり、法に定められた保証金を支払わなかったからである。検事はベルナイスを激しく告訴し、厳しい法の遂行を要求した。そしてベルナイスは 2 ヶ月の禁固、300 フランの罰金を言い渡され、控訴院に拘禁された。」と書かれていた⁽³⁷⁾。

さてことの真相について当時の裁判記録を繙いてみることにしよう。まず裁判の経過についてであるが、これは裁判所の発行している『ガゼット・デ・トリビューン』(Gazette des Tribunes)

(No. 5504) 12月14日号に載っているものを参考にする [E, 22, p. 209f]。「パリ軽犯罪裁判所 (Tribunal correctionnel de Paris) 裁判長ペロー (Perrot) 氏、12月13日の法廷。パリで保証金なく出版されたドイツ語雑誌『フォアヴェルツ』について」の法廷陳述を見ると以下のようであった。

「彼はシャルル・ルイ・ベルナイスという名でマインツに生まれ、26歳で(実は29歳——筆者)、文学と法のライセンスを持つ職業に携わりパリのマレー (Marais) 地区のサン・クロード (Saint-Claude) 街20番に住んでいると宣誓した。」以下裁判長とベルナイスの答弁を追う。『裁判長——貴方は1844年7月1日以来、ドイツ語新聞『フォアヴェルツ』の編集指導者でしたか。』「ベルナイス——確かに7月1日からこの新聞の編集指導をしてきました。出版社のミスでベルンシュタイン氏の名が7月1日以来出版された新聞の下に残っています。さらに私は9月12日以後(9月からベルンシュタイン編集になっていた——筆者) この新聞の編集を辞め、そのことを私が知る唯一の所有者であるベルンシュタイン氏に通達しました。」「裁判長——貴方はさる8月3日、7日、10日、14日、17日の各号に責任をもっていますか(3日はヴェーバー論文、ベルナイス論文、7日はマルクス、10日はマルクスと妻イエニーの論文が載っていた——筆者)」「ベルナイス——はい。この5つの号は私の編集で出版されました。」「裁判長——あなたは法で定められた保証金の前納を行わず、政治問題を取りあつかう週2回発行の定期刊行物を出版した罪があります。」「ベルナイス——私が編集長になって以来、フランスの政治には関係したことがございません。そこには、この政治に関する言葉は、たとえ暗示でさえ、一言も一つの事実も見い出せないでしょう。我々に与えられているホスピタリティーを尊重することが私の原理で、それを一度もやめたことはありません。しかし、私は我々がドイツの政治及びドイツの現在の事件に関係したということについては否定いたしません。」やがて検事側の弁護士セラール (Saillard) は8月3日62号のチェコ人による国王暗殺未遂事件を引用し、そこで『フォアヴェルツ』がフランスの憲法が折衷的内容を持つと非難したことをあげ、それをフランスの政治へ介入している証拠とした。こうした陳述が続いたあと、『フォアヴェルツ』はフランスの政治問題を取り扱ったという判決が下され、ベルナイスの有罪が確定した。

この裁判事実を見ると、ベルナイスへの裁判が表面上『フォアヴェルツ』の保証金未払いとフランスの政治への介入となっているが、節々にプロイセンの国王暗殺未遂事件との関係やシレジア織布工の一揆へのプロイセン王の慈善に反対したマルクスの記事があげられていることから、実際には『フォアヴェルツ』の編集部全体を訴追するつもりであったことが分かる。法的手続き上、裁判での訴追はベルナイスだけとなり、その他の人々に対しては国外追放という形を取ったものと思われる。

判決を受けたベルナイスはサント・ペラジー (Sainte Pélagie) に入獄する。サント・ペラジーはセーズ左岸にあった政治犯のみを対象とする刑務所であった。パリには、当時500人近くを収容する刑務所としてはそのほかフォルス (Force) 刑務所、サン・ラザール刑務所 (Saint-Lazare)、サン・ドニ (Saint-Denis) 刑務所等があった [E, 60, p. 76]。1845年のサント・ペラジーには501人が収容されていたが、その中でベルナイスのように1年以内の刑のものは実に381人にのぼっていた [E, 60, p. 72]。すなわちたいの囚人が比較的短期の拘留者であったということになる。刑務所に入る際には当然その人物について細かい調書が取られている。1844年10月31日から始まるサント・ペラジーの囚人リスト (Registre d'Écrou) にはベルナイスの名もある [A, 3, a]。そこには県警察のサインが書かれており、合計289枚の調書が入っている記録の中にあるベルナイス

の個人番号は、5951番である。それを見ると「入獄の日は1845年12月28日。職業は文学者、身長160cm、鼻は低く、口は普通、髪は褐色、顎は丸く、まゆげは褐色、顔は卵形、額は大きく、特徴は顎のまわりに輪状髭を蓄えていることである。」[A, 3, a]とある。ベルナイスは入獄と同時に、囚人の義務がどんなものであるかを聞き、それを守ることを宣誓した。こうしてかれの刑期が始まる。12月28日に入獄してから、1844年(記載に間違いがある。実は1845年である—筆者)2月27日に出獄することになった。1845年2月27日に出獄のサインをしている。しかし、ベルナイスは刑務所にいる間じっと刑期が終わるのを持っていたわけではなかった。彼は弁護士を通じて、恩赦を要求していた。

ベルナイスはこの判決に対して、サント・ペラジーから王による恩赦を要求する請願書を出す[A, 1, d]。彼の弁護士クレミュ(Crémieux)は次のように申請する。「何も知らない、何も望みもしない—外国人が、王の恩赦による助けを裁判所の方々にお願ひ致します。去る12月13日の判決によってセヌ軽犯罪裁判所はバヴァリアの臣民シャルル・ベルナイス氏を2ヶ月の実刑と300フランの罰金という判決を下しました。被告人は12月28日からサント・ペラジーの囚人となり、すでに刑期の半分を終えております。彼はフランスの政治家や党派についてはまったく無知で、ただその名前しか知らず、ドイツの利害にのみ関心を持ち、全くドイツ的視点から政治論文を書いてきました。彼はフランスの出版者が守るべき特殊な法に対して違反を犯したとは思っていなかったと思われる。彼もその無知を認めております。刑務所生活は、既に悪くしていた彼の健康状態にかなり悪い影響を与えております。王は善意を持たれておりますので、彼のために法の厳格さを和らげ、無知のために犯した罪を許し、真の正義を傷つけることはなさらないでしょうし、またそれは被告とその友人のためにかつフランスとその国の人々のために高らかに宣誓されている愛と奉仕の心を高めることになりましょう。」[A, 1, d]。ベルナイスは、このように健康上の理由をあげて1ヶ月の刑期で終わられるよう恩赦を要求した。この要求書を受け取った裁判所は内務省、法務省への連絡を取る。この関係の記録は現在パリのアルシーヴ・ナショナル(A. N.)に残されている。それを追って行くと次のような具合であった。1845年3月28日法務省は内務省に対して「ベルナイスと言う人物が、1844年12月13日のセヌ県の法廷の判決に対して恩赦を要求しております。彼はその判決で2ヶ月の禁固、罰金の刑を申し渡されました。私は、この要求に対して都合がよいと思われる結論に対するお考えをできるだけ早くお知らせ頂きたいと考えております。」[A, 1, d]と書きおけている。内務省は4月になって、むしろこの相談は法務大臣(Gardes des Sceaux)にすべきものであると返答していた。その後この恩赦については各部局で書類の通信が続く。法務大臣宛の4月30日の手紙にはベルナイスの詳しい経歴が載せられ、かつチェコ人が行った国王暗殺未遂事件の記事に触れ、それが暗殺を賛美したものであることが強調されていた。そしてベルナイスは12月28日にサント・ペラジーに入獄し、2月28日すでに刑を終えたことが付け加えられている。5月5日の内務省の法務省宛の手紙には、ベルナイスに対する恩赦は与える余地がどこにもないことが書かれてあった。またこうした刑期の半減と並んで大蔵省に対して罰金の額を下げるべきかどうか打診されている(5月23日)。しかしこれが了承されたかどうかは明確ではない。こうした往復書簡は6月まで続くが、結局ベルナイスの請願は受け入れられなかったようである⁽³⁸⁾。

さてベルナイスが刑に服している間、当の『フォアヴェルツ』はどうなっていたのであろうか。『フォアヴェルツ』は、1845年1月をもって週2回の発刊から月刊へと発行回数を変更することを知らせる。月刊にした場合保証金を払わなくてもよいという利点があった。また内容は月刊になるので1号当り8ボーゲン、96-100頁ぐらいのものになるはずであった。しかし実際にはこの雑誌は

予告だけに終り、発刊されることはなかった。もっとも『フォアヴェルツ』に関係していた社会主義者たちは、すでに『フォアヴェルツ』を諦め、1844年12月にスイスのローザンヌで刊行されたマールの『ブレッター・デア・ゲゲンヴァルト』(*Blätter der Gegenwart*)や、ピュットマンの編集した『ドイツ・ビュルガーブーフ』(*Deutsches Bürgerbuch*) (1845)、『ライン・ヤールビュッヒャー』(*Rheinische Jahrbücher*) (1845)、ヘスの『ゲゼルスシャフト・シュピーゲル』(*Gesellschaftsspiegel*) (1845)に活動の場所を変えつつあった。

ベルナイスの逮捕と『フォアヴェルツ』の廃刊へのフランス政府及びプロイセン政府の計画は以上のように進んでいったが、追放計画の方はどうであったであろうか。次にそれを見ておくことにする。

ii) マルクス、ルーゲ等の追放

マルクス、ルーゲ等に対する追放が明確になるのは、1844年12月21日であった。パリのアルニムはすでに政治的配慮を加え、ハイネを除いた追放者リストをギゾーに手渡ししていた。それによると「1. ハイน์リッヒ・ベルンシュタイン(ウィーン(Wien)出身)、2. カール・ルードヴィッヒ・ベルナイス(マイッツ出身)、3. カール・マルクス(トリニア出身)、4. フリードリッヒ・ウイヘルム・モイラー(ケルン(Köln)のそばのベンスベルク(Bensberg)出身)、5. フリードリッヒ・アントン・ヴィルト(Wild)(トリニア出身)、6. アーノルト・ルーゲ博士(ザクセン出身)、7. ハイน์リッヒ・ヴァイル(フランクフルト(Frankfurt)・アム・マイン出身)、8. フリードリッヒ・アレキサンダー・ヴィエヴェク(Vieweg)(ブラウンシュヴァイク(Braunschweig)出身)、9. ゲオルク・ヘルヴェーク(ヴュルテンベルク(Württemberg)出身)」と書かれてあった[E, 49, C. 194]。翌1月13日にはパリのアルニムはビューローへ、追放者はイギリスへ追放される予定で一旦カレー(Calais)に拘留される予定であると報告していた[E, 77, p. 189]。

しかし実際に県警察から追放を受けた人物はマルクス、ルーゲ、ベルナイス、ベルンシュタイン、ボルンシュテット等5名であった。すなわちギゾーやアルニムが当初考えていた『フォアヴェルツ』と関係している社会主義者達はこの追放から免れていた。この追放の知らせはすぐにドイツにも伝わった。1月28日『トリニア新聞』(Nr. 28)は25日のパリの通信員の記事としてこのニュースを取り上げ、『ラインの監視人』(*Rheinische Beobachter*)、『クリエ・フランセ』(*Courrier Français*) (1821-1851)が1月30日、『ナショナル』(*Le National*) (1830-1851)、『レフォルム』が1月31日にこのことを報じていた。この追放令がマルクス連の手に渡ったのは、1月25日頃であるが、すでにこの命令は1月11日に内務大臣デュシャテルがサインをして警察長官デレサール(Delessert) (1786-1858)に打診され、16日にデュシャテルのサインがついて発せられていた[E, 22, p. 92]。12月末からこの時期までに追放者が絞られたのは、フランス内務省がそのほかのドイツ人の追放の可能性を調べていたからであろう。モイラーはすでにフランスへ帰化し、ヘルヴェークは直接『フォアヴェルツ』と関係はなかったためにはずされたのでであろう。実はこの追放の過程でドイツの有名な学者が関係していたと言う問題があげられねばならないであろう。その名はアレクサンダー・フンボルト(Alexander Humboldt) (1769-1859)である。

フンボルトの介入説については従来さまざまな所で語られてはいるが、いまだに関与したという説とそうではなかったと言う説の二つが並存している。この原因は決定的な物的証拠がなく、フンボルトと当時のフランス政府及びプロイセン政府要人(例えばフンボルトの姪がベルリンのガブリ

エレ・ビューロー (Gabriele Bülow) (1791-1887) (*Gabriele von Bülow Tochter Wilhelm von Humboldts, Ein Lebensbild 1791-1887*, Berlin, 1897 参照) で、その夫こそこの追放の仕掛人の1人であったということとの関係によって推察するしかなかったからである。しかも彼がパリにやってきたのは、追放の最終決定が内務省で詰められていた1月4日であったので、この関与が一層真実味を帯びていたのである。エンゲルスがイエニー・マルクスの葬儀のときに(1881年12月5日) [MEW Bd. 19, S. 293], この関与について言及したために関与説は自明のことと思われてきたが、実は上に述べた状況証拠しか存在していなかったのである。ピールマンは、最近のフンボルト側からの研究によって、フンボルトが1月4日から誰と会ったかを分析しているが、それによると1月7日にルイ・フィリップに会ったことがわかる [E, 3, S. 780]。しかもこの時のフンボルトの役目はホーエンツォーレルン (Hohenzollern) 家とフランスとの関係改善であり、『フォアヴェルツ』のことはまったく無関係だったと言う [E, 3, S. 782]。ピールマンはこの事実からフンボルトが関係したはずはないと推定している。しかし、トリーアのカール・マルクス・ハウス (Karl-Marx-Haus) の所長ハンス・ペルガー (Hans Pelger) がそれに批判を与え、フランスの雑誌『1845年の友愛』 (*La Fraternité de 1845*) (1845-1848) (Nr. III, 1845, S. 25 ff) が「プロイセン政府の専制的計画を実行する用意をしたのは——あの有名な学者フンボルト男爵である」 [E, 53, S. 665] と書いていることをあげ、また『ドイツ・ブリュッセル新聞』でも1847年4月11日号にそのことが確認されていることをあげ、ピールマン説を批判している [E, 53, S. 666]。しかしこの反論もマルクス側に近いところの文献を提示したに過ぎず、必ずしも積極的だとは言えない。もっともこの追放命令がたとえフンボルトがいなくても遂行されたことが確認されれば、その関与はたいたいしたことではないことが分かるのだが⁽³⁹⁾。

さてこの追放命令を受けたときのマルクスは実は直接には『フォアヴェルツ』に関係していなかった。8月に書いた論文を最後として直接の執筆はなくなり、むしろ背後で影響力を行使していたようである(また彼は「正義者同盟」に対してもカテキズム等で影響力を行使していた [E, 48])。8月27日にエンゲルスと会った後 [E, 44] [E, 20, S. 32], 執筆計画の中で「ブルノー・バウアー批判」を仕上げることに決める。すでに『国民公会史』『国民経済学批判』のためのノートを取っていたマルクスは、その完成を後回しにしてバウアー批判を行う。7月31日付けの手紙でマルクスは自分のノートを見せたユンク (Jung) (1814-86) からバウアー批判を書くことを勧められているので [D, 5, S. 436] 8月初めにそれを思いついたのかもしれない。それはやがて『聖家族』 (*Die heilige Familie*) [D, 2] (10月に完成) となり、フランクフルトのレーヴェンタール (Löwenthal) から1845年2月に出版される [E, 46, S. 364]。マルクスはこの時フレーベルの所から出版しようとしたが、ルーゲに邪魔されている [E, 58, S. 379]。マルクスとルーゲとの関係は8月以来悪化の一途を辿っていったことが分かる。さらにこの出版についてはベルンシュタインにも頼んでいた(1844年秋頃) [E, 3, S. 508] が、彼にも断わられている。この当時すでにルーゲとマルクスとが対立していただけでなく、マルクスとベルンシュタインも対立していたようである(1844年秋マルクスはシュティルナー (Max Stirner 本名 Kaspar Schmidt) (1806-56) への批判を『フォアヴェルツ』へ書こうとするが、それも実現していない)。追放命令がルーゲも含めて『フォアヴェルツ』の主要な関係者に与えられているのは、おそらく10月にベルリンに帰ったポルンシュテットが『フォアヴェルツ』内でのその後の変化を充分把握していなかったことから起こって来たのかも知れない⁽⁴⁰⁾。

マルクスやルーゲは1月25日頃追放命令を受ける。その命令書には24時間以内にパリ及びフラ

ンスから立ち去れという命令が書かれてあった。ルーゲは、この命令に対して不満を持ち、大使館に行って抗議を行う [E, 58, S. 393]。そこで彼はザクセンの市民権を持っているので、プロイセン人ではないことを強調し、追放の猶予を要求し、それを受け入れさせる。またベルナイスは当時サント・ペラジーにいたために、直接この追放の対象とはならなかった。ベルンシュタインも、警察に行って『フォアヴェルツ』を今後出版しないという約束のもとで追放を免れることになった [E, 6, S. 356]。つまり、『フォアヴェルツ』関係者で結局追放を受けたのはマルクスと、皮肉なことにプロイセンのスパイでこの追放に関係していたとみられるボルンシュテットの2人にすぎなかった（ボルンシュテットのベルギー入国については [E, 63, 115 f] 参照）。要するにマルクスはプロイセン人（トリーアはプロイセンであった）であり、当時世間で無名であったと言うこと、ボルンシュテットはおそらくスパイであることを隠すための理由で、2人だけがその対象となってしまったわけである。マルクスは追放によって必要になるであろう資金を調達するために、すでに1月にパリの彼の家を訪れていたダルムシュタット (Darmstadt) のレスケ (Leske) と『国民経済学批判』の契約 (2月1日) を結ぶ (1847年2月レスケによって破棄される)。

当時外国へ行くには、県警察 (Préfecture de Police) に行きパスポート (passeport) をもらう必要があった [E, 60, p. 8 f]。発行者は内務省であり、目的地を明記し、1828年3月11日の法にしたがうことが義務づけられていた。これは必ずしもフランス人に対してのみ適用されるのではなく外国人及び国籍のない人にも適用される可能性があった。マルクスは1845年にプロイセン国籍を失うことになるので⁽⁴¹⁾、まだ当時はプロイセン国籍をもっていたはずである (『グレンツボーテン』がマルクスはフランス人としてのフリーのパスポートを持っていたと言うのは間違いといえる [E, 22, p. 56])。したがってもしマルクスが外国へ行く場合、プロイセンの大使館か、パリ県警察に行き通行証をもらわねばならなかったはずである。問題は彼の場合、追放であるから、パリの県警察から二度とフランス国内に入国してはならないという命令書を携え、しかも目的地ベルギーと明記されたパスポートを持っていたと思われる⁽⁴²⁾。マルクス等の追放先については、当初イギリスが考えられていたが (彼らは『独仏年誌』、『フォアヴェルツ』の発行によって、プロイセンもしくは他のドイツ領内に入国した場合逮捕されることになっていた [E, 2, S. 43])、ベルギー政府との間に了解が取れたからかもしれない。2月2日ブリュッセルに到着したマルクスは2月7日ベルギー政府に居住許可を申請する (この点についての記述は [E, 63, SS. 102-105] 参照、またベルギー滞在については [E, 46] 参照)。

マルクスの追放について新聞、警察、大使館の報告を見ると興味深い事実に気付く。つまり、マルクスはその当時ほとんど関心を持たれていなかった人物と言うことが分かるからである。『フォアヴェルツ』の廃刊、ルーゲ等の追放は確かに大きなニュースとしてとらえられてはいたが、その中のマルクスなる人物については今一つ明確には捉えられてはいなかったようである。フランスのベルギー在住大使館の2月半ばのギゾーへの報告では、マルクスの名はまったく出て来ていない。そこではベルギーに来たドイツ人追放者の中心人物がボルンシュテットであり、彼らはパリを去りベルギーに来たが、ベルギー政府は彼らを取り締まることはできないであろうと報告している [A, 4, b]。またマルクスの名は、ヘルヴェークやルーゲ、ハイネといった彼の友人は別としてドイツ人の社会でもあまり知られていなかったようである。フライリヒラート (Freiligrath) (1810-76) が3月7日にブリュッセルからエベナー (Ebener) に宛てた手紙によると、彼は『グレンツボーテン』の編集者クランダ (Kuranda) にマルクスがパリから追放された事実について語ったが、クランダはその名を知らず、「すみませんマルクスとはだれですか」と彼に聞いたという [E, 1, Bd. 2,

S. 96] [E, 20, S. 55]。こういう状態であったから、マルクスの追放は世間の注目を受けていたわけではなかったであろう。あくまでもボルンシュテットを含む一味として問題にされているに過ぎないものであった。

不思議なことに重要人物ベルナイス、ベルンシュタイン、ルーゲは追放命令を受けたにもかかわらず、追放されなかったのである。いわば小物(?)だけが追放されたわけである。このようにルーゲとベルンシュタインという『フォアヴェルツ』と『独仏年誌』の中心人物がフランス政府とプロイセン政府に妥協することによって追放を免れ、追放された人物が比較的重要な人物でなかったとすれば、フランス政府の追放命令の意図はいったいどこにあったというのであろうか。たんにプロイセン政府の要求に対する外交的配慮に過ぎなかったのであろうか。とにかくドイツ人数名がギゾーによって追放命令を受けたことは確実にプロイセン政府に報告されてはいるのであるが、それらの人物がすべてどこの国に追放されたかについては明確に報告されていないというのも少し変ではある。マルクスやルーゲがイギリスに渡ったとか [E, 77, p. 190 f]、マルクス、ベルンシュタイン、ベルナイス等がカレーへ向かったとか [E, 77, p. 192]、今一つはっきりとしないデマが飛び交うだけで、追放された人々の仲間同士の情報は別として、公式的な筋の情報ははっきりせず、フランス政府の側からのものは先のボルンシュテットに関するものが最初で、ドイツ側からは2月17日マルクスがブリュッセルにいるということを伝えた情報が [E, 1, Bd. 2, S. 87 f] 最初であった。つまり実際の追放の状況については両国ともあまり熱心ではなかったということである。

もしマルクスが自らの意志でブリュッセルの地を選んだとすれば、それはベルギーがフランス以上に出版が自由であったことが考えられるであろう。しかし、その点は明確ではない。マルクスはベルギーに行くとフライリヒラートと連絡を取り、ベルギーに住むドイツ人の仲間を捜して行く。

さてそのままパリに残ったベルナイス、ベルンシュタイン、ルーゲはどうなったのであろう。ルーゲは3月末までパリにいた後、チューリッヒに移っている。しかも彼は1848年革命前に人相書が各州に回っていたのにもかかわらずプロイセン(ライプツヒ(Leipzig))に戻っているのである。一方ベルンシュタインはその後もパリに残り、3月にはベルナイスと協力してハヴァス(Havas)の通信網をつかって「パリ新聞通信事務」を解説したり、パリで「貸出図書館」(Leihbibliothek)(ジャン・ジャック・ルソー(Jean-Jacques-Rousseau)通り8番)を作ったりして、革命運動からは離れて行く。

ただベルナイスは追放令に関して一つの重要な記事をフランスの有力誌『レフォルム』[E, 22, pp. 213-218]に掲載している(1845年2月14日)⁽⁴³⁾。このなかで彼はフランス政府がプロイセン政府の要求に屈したことをフランス人に訴え、フランス人はプロイセン人に内政干渉をされているのだということを強調することによって、ルーゲ等への追放を非難している。しかしこの非難はフンボルトの目にも触れており [E, 53, S. 665]、フランス人ばかりかプロイセン政府にも知られていたようである。さらに奇妙なことはこうした非難をフランスの刑務所にいたベルナイスが出来たということ、そして彼が刑務所でなんの取調べも受けなかったということである。それは逆にギゾーがこの追放にまったく無関心で、取るに足らぬものであったと考えていたということを示しているのかもしれない。おそらく『フォアヴェルツ』弾圧およびその関係者の追放はギゾー政府にとっては数多くあった事件の一つに過ぎなかったのかもしれない。ただこの些細な事件からマルクスと共産主義との関係が発展し、その後の歴史が大きく進展して行ったというのも皮肉な話だが事実である。マルクスはブリュッセルへ行き、そこで「共産主義通信同盟」を発展させ、あの『共産党宣言』を生み出したのである。そしてその1848年2月にフランスでは革命が起こり、ギゾー政府の後ろだ

てであったルイ・フィリップ王政は崩壊することになる。

結 び

こうして『フォアヴェルツ』は1844年のみで廃刊となるが、この新聞活動はその後のドイツ人亡命者たちの活動に大きな影響を残すことになった。まずその第一はマルクス等がルーゲから離れ、『フォアヴェルツ』に活動の場を求めたことによって、『フォアヴェルツ』は共産主義的色彩を強め、それがドイツの共産主義運動を育む原因となったことである。しかもそれはマルクス自身の思想形成とも密接に関連していた。『フォアヴェルツ』の7月から8月までにかかれた論文のいくつかは、マルクスの『経・哲草稿』、「パリノート」の中の文章が利用された形跡があり、マルクスの思想展開と『フォアヴェルツ』の理論展開が一致していた可能性がある。これは『経・哲草稿』「パリノート」の一方的な『フォアヴェルツ』への影響だけでなく、『フォアヴェルツ』でのジャーナリスト的問題の討議が逆に『経・哲草稿』、「パリノート」へ影響したとも考えられよう。

第二は『フォアヴェルツ』への弾圧によって、ドイツ人亡命者間の立場が明確になり、しかもルーゲやベルンシュタイン等とマルクス等との立場の相違が明確になったことである。このことはヘーゲル左派の立場からマルクスが完全に離脱し、「共産主義同盟」(Bund der Kommunisten)の基礎となる道をマルクスが自ら望んだということを意味している。ルーゲやベルンシュタインと違って追放命令に対してマルクスが毅然とした態度を取ったと言うこともその表れのひとつだろう。

第三はパリを中心としたドイツ人亡命者の活動は『フォアヴェルツ』の弾圧によって終わり、ブリュッセル、そしてロンドンといった新しい活動の中心が出来たことである。ブリュッセル(48年革命によってその役割はおわる)、そしてロンドンで急進的亡命者が活躍する場が出来たことによって、マルクスの国民経済学批判はより高度の内容を吸収し得るようになるのである。

(本稿作成に当たって、以下の図書館および古文書館の資料を利用させていただいたことにここで謝意を表しておきたい。記録等のマニエスクリプトについては、パリのアルシーヴ・ナショナル(A.N.) [A. 1], フランス外務省アルシーヴ(A.M.A.E.) [A. 4], パリ市・県アルシーヴ(A.D.V.P.) [A. 3], パリ市警アルシーヴ(A.P.P.) [A. 2]。雑誌, 本については、ドイツのキール(Kiel)市アルヒーフ, キール市シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン(Schleswig-Holstein)図書館, チューリッヒ・スイス中央図書館, 東大法学部図書館, 早稲田大学附属図書館, 慶応義塾大学三田情報センター, そして勤務先でもある一橋大学の附属図書館および社会科学古典資料センター, またドイツ人救済協会へのマルクスの参加のドキュメンテを含む論文集を送って下さったカール・マルクス・ハウスのハンス・ベルガー氏にも謝意を表しておきたい。)

(一橋大学社会科学古典資料センター助手)

注

(1) 『フォアヴェルツ』に関する研究史を見た場合、最初に本格的な研究と考えてよいのはMayer, G. の [E, 47] だろう。その後 Schiller, P. [E, 62], Hirth, F. [E, 34] の研究を経て, Cornu, A. [E, 13] [E, 14] そして Grandjone, J. [E, 22] と Schmidt, W. [E, 64] の復刻版の解説によってかなり詳細になってきている。しかしマルクスとルーゲとの関係や、マルクスと『フォアヴェルツ』との関係においてまだまだ多くの事実が不明確である。特に [E, 22] を除けばドイツ側資料に頼る研究が多く、フランス側からの研究不足が顕著である。本稿はフランス側の資料を使うことを特色としている。わが国においても他の初期マルクス研究と比べて手薄で、良知の [E, 76] [E, 77] と廣松の [E, 72] に触れられている程度である。

(2) たとえばジャーナリストとしてのマルクスからの研究が一つ考えられよう（これについては本シリーズ [E, 78] で杉原がこの点の研究の将来性を指摘している）。それについては Bittel, K. [E, 4], Trinh Van Thao [E, 69], Гуревич [E, 27], 拙稿 [E, 73] 等がある。

(3) *Vorwärts* (34.5×23 cm) (印刷所 Paul Renouard) は週2回(水, 土)に発行されていた。現在パリの Bibliothèque Nationale に保存されているが (Z. 2412), 大変稀覯である。しかし複製版 [E, 64] がある。

(4) フランスでもドイツ人亡命者達の動きには警戒していた。例えば「追放者同盟」(フテンス語では Ligue allemande des proscrites あるいは Ligue des Bannis) について, 「友愛同盟」(フランス語では Union fraternité) については1842年から43年にかけて詳しい報告が成されていた [A, 1, a]。

(5) 『フォアヴェルツ』5月11日38号には靴職人が2000人, 裁縫職人が4000人いると書かれている。

(6) Archives Nationales にはこの関係資料が保存されている [A, 1, b]。『フォアヴェルツ』以外でもドイツ語新聞『ドイツ・パリ・ジャーナル』(*Deutsch-Pariser-Journal*) (1846年ドイツ人のために出された穏健的雑誌)の登録者もある [A, 1, c]。

(7) 当時のドイツ人の読書室はパレ・ロワイヤル (Palais Royal) にあった。そこにはフランスの主要新聞だけでなく, 『アウグスブルク・アルゲマイネ新聞』, 『アルゲマイネ・プロイセン新聞』(*Allgemeine Preussischezeitung*), 『ドイツ・アルゲマイネ新聞』(*Deutsch Allgemeinezeitung*), 『ハーノヴァー新聞』(*Hannoverzeitung*), 『フォアヴェルツ』等が置いてあった。座席料20サンチームでそれらを読むことができた(『フォアヴェルツ』2月21日15号の宣伝参照)。

(8) 『アウグスブルク・アルゲマイネ新聞』は1844年1月5日 No. 5号で『フォアヴェルツ』の発刊の知らせを載せた。『フォアヴェルツ』の発刊については, 後にあげるルーゲや『グレンツボートン』やスパイの報告とは別に, フランスの新聞も関心を示していた。1月20日『フォアヴェルツ』6号には, 関心を示しているフランスの新聞があげられている。その中には『世紀』(*Siècle*), 『パリのクロニック』(*Chronique de Paris*) (1841-45), 『世界』(*Globe*) (1837-45), 『ルヴェー・アンデパンダンテ』があった。また『フォアヴェルツ』のドイツでの評価もあげて, フランスの地方や, ドイツ, スイス, ベルギー, イギリス, 北アメリカからも注文が来ていることが7号のサブタイトルに書かれている。

(9) 12月12日メッテルニヒは『フォアヴェルツ』と『独仏年誌』の発刊計画を事前に知った [E, 22, p. 85]。スパイ報告についてはオーストリアのものとして [E, 1], [E, 38] 等があり, ドイツ側のものとして [E, 17], [E, 66], また当時有名であったものに [E, 5], [E, 70] などがあつた。また特に追放や『フォアヴェルツ』の廃刊についてのスパイ報告を扱ったものとして [E, 10] [E, 29] [E, 46] [E, 49] [E, 77] がある。

(10) プロイセンでの『フォアヴェルツ』の状況について『フォアヴェルツ』の3月26日23号は次のように書いている。「ドイツではわれわれの新聞は禁止されている。——反動的プロイセン政府は, 我が新聞の第一号が発刊される前にすべての同国の郵便物警察に対して, 一部の新聞もプロイセンに入れぬように命令していた。」

(11) 『フォアヴェルツ』の価格は週2回発行で年間購読24フランであり, 日刊『プレス』の40フランに比べてやや高いと言える。ちなみに『独仏年誌』は年間12号で40フランであつた。[E, 3] [E, 6] の表紙あるいは裏表紙の価格欄参照。

(12) 他の国の亡命者達の間にはすでにこうした救済協会があつた。たとえばイタリア人やポーランド人の救済協会の活躍は華やかであつた(『フォアヴェルツ』1月31日9号参照)。

(13) ドイツにおける社会主義新聞として, Grün (1817-87) 編の *Neue Anekdoten*, 1845, (Mon. 1057) S. 224 (パリのグリーンについては [E, 68] 参照) でも『トリリア新聞』, 『マンハイム夕刊新聞』があげられている。

(14) そもそも出版の自由の論議を善き起こしたのはヨハン・ヤコービー (Johann Jakoby) (1805-77) の本 [E, 39] であつた。

(15) アレクサンドル6世で在位は1492年から1503年までであるから, この記述は間違いと思われる。

(16) 実はマルクスもこの協会に15フランを払い1844年4月から1845年3月までの参加会員となつていた。その事実は1845年9月21日の『ドイツの水先案内人』Jg. 2, Nr. 34にのつた名簿より分かる。Pelger, H. 他編, *Unbekanntes von Fr. Engels und K. Marx.*, Teil 1, Schriften aus dem Karl-Marx-Haus, 33. 1986. S. 18f. そのほかハイネ, エヴェルベック, モイラーなども会員であつた。

(17) 『独仏年誌』(25×17 cm) は Pigale 通り 46 番の印刷屋 Worms から出版される。編集部はマルクスやルーゲが住む Vaneau 街の22番にあつた。『独仏年誌』のリプリント版はその後1925年にライブチヒ

で出版された (Soda H-249)。最近では 1973 年に出版されている [E, 36]。

(18) マルクスとルーゲは 2 月 25 日に印刷所から『独仏年誌』を受け取っていた [E, 77, p. 176]。

(19) フランクフルトのフランス大使館の報告でも『独仏年誌』のことが報告され、ルーゲがフレーベルの出版社の外国での基地をパリに作るとうとしていると書かれている [A, 4, a]。

(20) パリ・セーズ県のアルシーヴの当時の帰化申請書を見た限りでは、マルクスをはじめその他の執筆者の帰化申請書はない [A, 3, b, c]。

(21) おそらくルーゲはシュタイン (Stein) から個人的にフランス社会主義者の名を聞いていたのであろう (1842 年 1 月 4 日のシュタインよりルーゲ宛の手紙 [E, 37, p. 219])。これらの人物はシュタインの作品のなかの人物であった ([E, 40] 参照)。

(22) ヘルヴェークが『独仏年誌』で力を持っていたことは 1844 年 4 月 30 日のスパイ報告から分かる [E, 1, Bd. 2, S. 30]。ヘルヴェークの『21 ボーゲン』(*Einundzwanzig Bogen aus der Schweiz*) (Mon. 1269)) の仲間にはヘス、パウアー等がいた。エンゲルスを『独仏年誌』へ誘った人物については、マルクスとする Mayer [E, 47]、ヘスと考える Elke Röllig [E, 57]、ヘルヴェークと考える Cornu [E, 13] [E, 14]、Knieriem [E, 41] そしてフレーベル説があるが、もっとも有力なもののはヘルヴェーク説と思われる。

(23) すでに 2 月 25 日のスパイ報告でも、『独仏年誌』の困難が伝えられている [E, 1, Bd. 2, S. 23]。

(24) フレーベルについては [E, 18] [E, 19] [E, 50] を参照。

(25) すでにルーゲやマルクスの行動についてはこの雑誌にヴァイルが 1843 年に下記の論文を掲載していた。A. Weil 「1830 年以降のドイツにおける思想及び政党の運動」 *Mouvement des Idées et des Partis Politiques en Allemagne depuis 1830*, Tome 11, 1843, p. 536.

(26) 「パリノート」で引用されている文献は [C, 1] [C, 2] [C, 3] [C, 5] [C, 6] [C, 7] [C, 8] [C, 9] [C, 13] [C, 14] [C, 15] [C, 16] [C, 17] [C, 18] [C, 19] [C, 20] [C, 21] [C, 23] である。特に『フォアヴェルツ』では [C, 1] [C, 16] [C, 18] [C, 20] が使われているようである。

(27) 『国民公会史』については、特にルヴァスール [C, 6] のものが『フォアヴェルツ』に 8 月、10 月、12 月に掲載されていた。

(28) ベルナイスはスパイの最初の報告によるとマルクスと同一人物と考えられていたようである (5 月 8 日パリのアルニムの報告) [E, 77, p. 177]。しかし 9 月 24 日になるとベルナイスとマルクスが全くちがう人物であることが分かったようである [E, 77, p. 188]。こうしたスパイの勘違いとは別にベルナイスの経済学批判の記事はマルクスの経済学批判と類似点を持っていた。たとえば 7 月 3 日のベルナイスのものと思われる匿名論文には、あたかも「第一草稿」を思わせるような経済学批判があった。おそらくマルクスが教授していたのかも知れない。しかも、9 月 6 日にはベルナイスは友人に「ミルヤリカードの国民経済学を見たまえ」とあたかもマルクスのミル評注を知っているかのようなふりを書いて [E, 49, S. 7]。

(29) 詳しい事件の経過については [E, 71] [E, 75] 参照。

(30) これについてはヴォルフが詳しく分析している。[E, 65] [E, 67] [E, 71] 参照。

(31) 論文の詳しい内容、さらに各論文と『経・哲草稿』、「パリノート」との引用の対比については拙稿 [E, 78] 参照。

(32) 連載に使われた本はマルクス所有のものであった (1844 年秋 マルクスよりベルシュタイン宛の手紙 [D, 3, S. 431]。またマルクス所有のモレリ [C, 10] も使用されていた)。こうした連載には他にエンゲルスの「イギリスの状態」[D, 1]、エルッカーズ [C, 12] があつた。また当時有名であつたヴァイトリンク (Weitling) (主著は [C, 21]) を歓迎する *New Moral World* [C, 11] の記事も紹介されていた。マルクス宛のヴァイトリンクの手紙参照 [E, 10, S. 199])。

(33) ルイ・フィリップ暗殺事件のうち主要なものをあげると 1835 年フィエシ (Fieschi) 事件、1836 年のアリボー (Alibaud) 事件、1840 年のダルメ (Darmès) 事件そして 1841 年のケニス事件である ([E, 12] 参照)。

(34) ケニス事件は 1841 年 9 月 13 日に起こつた事件で、そこにはヘルマン (Hermann) とクーン (Kuhn) というドイツ人が入っていた [A, 2]。1839 年には季節社の事件が起きており、それにドイツ人の秘密結社も参加していたため、フランスはドイツ人の秘密結社に神経を尖らせることになった (ケニス事件については [E, 55] を参照)。

(35) ハイネは、1848 年になってフランス政府から年金をもらっていたことを自ら公言した [E, 52, S. 262]。当時のハイネについては [E, 15]、[E, 52] を参照。

(36) ルーゲは『アウトグスブルク・アルゲマイネ新聞』Nr. 254 (S. 2029) で、自分は『フォアヴェルツ』と

関係しておらず、共産主義者でもないと言き、『フォアヴェルツ』の批判を書く。それに対してベルナイスは、『フォアヴェルツ』で「自分は一度もサンキュロットであるとか、コミュニストであるとかいったことはない」と反批判する。『フォアヴェルツ』の評価はバーゼルの『スイス国民新聞』(*Schweizerische Nationalzeitung*)の記事を見ると分かりやすい。『フォアヴェルツ』について「共産主義——急進主義の『フォアヴェルツ』はあらゆる正直ものから憎まれていて、フランスの出版社もその編集者と衝突している」と書いている(『フォアヴェルツ』No. 82, 10月12日の記事)。

(37) そのほか、『レフォルム』(12月5日), 『グループ』(10月8日), 『レスペランス』(*L'Esperance*) (1839-1866) (9月28日, 10月4日), 『ルヴュー・ド・パリ』(*Revue de Paris*) (1829-1845) (9月28日, 10月1日), 『ナショナル』(9月17日)でベルナイスの裁判の様子が述べられている。

(38) ベルナイスはサント・ペラジーにいた時、当時フランスを騒がせたプラスラン(*Praslin*) (プラスラン事件とはプラスラン伯爵夫人が夫に殺された事件のことであり)事件についてまとめようとしていた[E, 33]。

(39) フライリヒラートもブフナー (*Buchner, K.*) (1800-72) への1845年2月10日の手紙でフンボルトが関係していると考えていた [E, 9, S. 141] [E, 20, S. 54f]。

(40) ルーゲのフレーベル宛の1845年1月26日の手紙が受け取った日を示す証拠となっている [E, 58, S. 391]。

(41) Trier Stadtbibliothek の中には、マルクスがトリーア市役所とコブレンツ州庁と交わした国籍離脱についての資料が納められている (Stadtarchiv 15/0318)。それによると1845年12月に彼は国籍を失っている。しかし、彼は48年革命のときにフランスの追放令が無効になったためフランスへ再入国する。しかも4月にはフランス政府発行のパスポートを受け、プロイセンへ入っている。

(42) ベルナイスも監獄の中でフランス政府にベルギー行きパスポートを渡されている [E, 63, S. 105]。

(43) 『レフォルム』は48年革命で臨時政府委員となったフロコン (*Flocon*) (1800-66) が編集していた雑誌である (*Lucien de la Hodde, Histoire des Sociétés Secrètes et du parti républicain de 1830 à 1848* (貴J-391) 10章, 14章参照)。フロコンはやがてマルクスのフランス入国を手伝うことになる。

引用文献一覧

○引用はすべて下記の文献番号による。またページについては英語、日本語、フランス語は P, ドイツ語は S, ロシア語は C で表記する。

○入手しにくい文献資料は文献番号の後に所蔵機関を明記してある。例 (一橋大学附属図書館)

○古典資料センター所蔵の場合請求記号を明記してある。例 (Mon. 1)

○雑誌名で頻出のものは以下の省略が用いられる。

A.G.S.A. *Archiv für die Geschichte des Sozialismus der Arbeiterbewegung.*

A.S.G. *Archiv für Sozialgeschichte.*

B.G.A. *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung.*

B.M.E.F. *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung.*

A. アルヒーフ資料

1. Archives Nationales à Paris (略称 A.N.)

a. BB¹⁸ 1408 d^m 5847

Dossier relatif à une association secrète forcée à Paris, Ligue allemande des Proscrits.

b. F¹⁸-425

Vorwärts の登録資料

c. F¹⁸-337

Vorwärts の後に現れたドイツ語新聞 “*Deutsche Pariser Journal*” の登録資料

d. BB²⁴ 251-85

Bernays の恩赦関係の資料

e. F⁷ 12200

通行証に関する資料

f. F⁷ 12238

帰化に関する資料

2. Archives de Préfecture de la Police à Paris (略称 A.P.P.)

- Série Aa Cartes 426, Événements de 1840-47, Quenisset 事件
3. Archives départementales et de la ville de Paris (略称 A.D.V.P.)
 - a. DY^s-36 Sainte Pélagie 刑務所の記録
 - b. V.D.^s-624 No. 9 帰化申請書関係
 - c. Vois 7-I^s 帰化申請書
アーノルト・ルーゲの帰化申請書 No. 210
 4. Archives du ministère des affaires étrangères à Paris (略称 A.M.A.E.)
 - a. Vol. 802 フランクフルトからの報告 1844年7月-1850年10月
 - b. Vol. 26 1845年ベルギーからの報告
- B. 新聞
1. *Augusburg Allgemeine Zeitung*, 1844. (慶応大学三田情報センター, 以下慶応大学と略)
 2. *Deutsch-Brüsseler Zeitung*, 1847-1848, Microfilm (慶応大学) (reprint, 1931)
 3. *Deutsch-Französische Jahrbücher*, 1844. (Mon. 2038) (reprint, 1973)
 4. *La Revue Indépendante*, 1844. (慶応大学)
 5. *Trier'sche Zeitung*, 1844. Microfilm (慶応大学)
 6. *Vorwärts*, 1844. (Bibliothèque Nationale à Paris) (reprint, 1975)
- C. 『フォアヴェルツ』で使われた文献またはマルクスが『経・哲草稿』, 「バリノート」で使った文献。
1. Buret, E., *De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France*, vol. 1, 1840. (Fr. 211)
 2. Destutt de Tracy, *Éléments d'Idéologie*, Paris, 1826. (Fr. 428)
 3. Engels, F., *Umriss einer Kritik der Nationalökonomie (Deutsch Französische Jahrbücher 所収)*
 4. Feuerbach, L., *Das Wesen des Glaubens in Sinne Luthers*, Leipzig, 1844.
 5. Hegel, G., *Die Phänomenologie des Geistes*, Hrsg. von Johann Schulze, Werke 2, 1832. (貴 C-141)
 6. Levasseur de la Sarthe, *Mémoires de Levasseur de la Sarthe*, Paris, 1829.
 7. List, F., *Das nationale System der politischen Oekonomie*. 1841. (Comp. 189)
 8. McCulloch, J., *Discours sur l'origine, les progrès, les objets particuliers, et l'importance de l'économie politique*, 1825. (貴 J-678)
 9. Mill, J., *Éléments d'Économie politique*, tr. par Parisot, Paris, 1823. (Goldsmiths'-Kress, 23754)
 10. Morelly, *Code de la nature ou le véritable esprit de ses lois.*, Fr. Villegardelle éd., 1841. (Fr. 1052)
 11. *New moral world* (貴 A-293)
 12. Oelckers, Th., *Die Bewegung des Socialismus und Kommunismus*, Leipzig, 1844. (Mon. 2416)
 13. Osiander, *Enttäuschung des Publikums über die Interessen des Handels, der Industrie und der Landwirtschaft*, 1842. (Mon. 2463)
 14. Osiander, *Über den Handelsverkehr der Völker*, 1842. (Mon. 2462)
 15. Ricardo, D., *Des Principes de l'économie politique et de l'impôt*, 3 éd., Paris, 1835.
 16. Say, J.-B., *Cours complet d'économie politique pratique*, 3 éd. 1836.
 17. Say, J.-B., *Traité d'économie*, 3 éd., 1817. (Fr. 1430)
 18. Schulz, W., *Die Bewegung der Produktion*, 1843. (reprint, 1974)
 19. Schüz, C. W. C., *Grundsätze der National-Oekonomie*, 1843. (Comp. 350)
 20. Skarbek, Fr., *Théorie des richesses sociales*, Paris, 1824. (Franklin. 11021)
 21. Smith, A., *Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations*, tr. par Garnier, 1802. (Goldsmiths'-Kress 18412)
 22. Weitling, W., *Garantien der Harmonie und Freiheit*, Vivis, 1842. (Mon. 5213)
 23. Xenophon von Athen, *Werke*.
- D. マルクスとエンゲルスの著作

1. *Marx Engels Werke* (略 *MEW*), Berlin. Bd. 1.
2. *MEW* Bd. 2.
3. *MEW* Bd. 27.
4. *MEW* Bd. 40.
5. Karl Marx Friedrich Engels Briefwechsel bis April 1846, 1975. III/1. 1975. *Marx Engels Gesamtausgabe* (略 新 *MEGA*), III/2, Berlin, 1979.
6. Ökonomisch-philosophische Manuscripte, 新 *MEGA*, IV/1
7. Karl Marx Friedrich Engels Exzerpte und Notizen 1843 bis Januar, 1845, 新 *MEGA* IV/2, Berlin, 1981.

E.

1. Adler, Hans (Hrsg), *Literarische Geheimberichte Protokolle der Metternich-Agenten*, Bd. 1, 1840-48, 1977, Bd. 2, 1844-48, 1981.
2. Andreas, Bert und Mönke Wolfgang (Hrsg) Neue Daten zur "Deutsche Ideologie" mit einem unbekanntem Brief von Karl Marx und anderen Dokumenten. A.S.G. Bd. 8. 1968.
3. Biermann, R.-Kurt, Alexander von Humboldt und seine vermutete Beteiligung an Karl Marx' Ausweisung aus Paris 1845. B.G.A. no. 6, 1984.
4. Bittel, Karl, *Karl Marx als Journalist*, Berlin, 1953.
5. [Bluntschli, Johann Caspar], *Die Kommunisten in der Schweiz, nach den bei Weitling vorgefundenen Papieren*, Zürich, 1843. (Mon. 5110)
6. Börnstein Heinrich, *Fünfundsiebzig Jahre in der Alten und Neuen Welt, Memoiren eines Unbedeutenden*, Leipzig, 1881. (一橋大学附属図書館, 以下一橋大学と略)
7. Bottigelli, E., Les "Annales Franco-Allemandes" et l'opinion française, *La Pensée*, No. 110, 1963.
8. Brügel, Fritz, Die Verlagsgeschichte des "Heiligen Familie", *Der Kampf*, Jg. 21, 1928.
9. Buchner, W., *Ferdinand Freiligrath, Ein Dichterleben in Briefen*. 1882, Bd. II. (一橋大学)
10. *Der Bund der Kommunisten, Dokumente und Materialien* Bd. 1, 1836-1849, Berlin, 1983.
11. Cadot, Michel, *La Russe dans la vie intellectuelle française 1839-1856*, Paris, 1967.
12. Charon-Bordas, Jeannine, *Cour des Pairs, Procès politiques*, III, La monarchie de juillet 1835-1848. Inventaire des articles CC 671 à 852, 1984.
13. Cornu, Auguste, *Karl Marx und Friedrich Engels*, Bd. I, Berlin, 1954.
14. —, *Karl Marx und Friedrich Engels*, Bd. II, Berlin, 1962.
15. Dresch, Joseph, *Heine à Paris (1831-1856)*, Paris, 1956.
16. Euloge, George-André, *Histoire de la Police des origines à 1910*, Paris, 1985.
17. Favre/Lardy, Generalbericht [...] über die geheime deutsche Propaganda, *Eidgenössische Monatschrift*, Zürich, 1846. (Zürich Zentralbibliothek)
18. Feuz, E., *Julius Fröbel, Seine politische Entwicklung bis 1849*, Bern, 1932 (一橋大学)
19. Froebel, *Ein Lebenslauf*, Bd. I, 1890.
20. *Gespräche mit Marx und Engels*, Hrsg. Hans Magnus Enzensberger, Frankfurt a. Main, 1973.
21. Grandjone, Jacques, État sommaire des dépôts d'archives françaises sur le mouvement ouvrier et les émigrés allemands de 1830 à 1851/52, A.S.G. Bd. 12, 1972.
22. —, *Marx et les communistes allemands à Paris, Vorwärts, 1844*, Paris, 1974.
23. —, La Presse de l'émigration allemande en France (1795-1848) et en Europe (1830-1848), A.S.G. Bd. 10, 1970.
24. —, Eléments statistiques pour une étude de l'immigration étrangère en France de 1830 à 1851, A.S.G. Bd. 15, 1975.
25. —, Du Vorwärts à Lutezia: à propos des rapports entre Heine, Marx et Bernays en 1844 et 1848, *Heinrich Heine 1797-1856*, Schriften aus dem Karl-Marx-Haus, 1981.
26. Gunschera, Hanns, *Die Kieler Gelehrtenfamilie Weber in ihrer Bedeutung für die Uni-*

- versität und des Gesundheitswesen in Schleswig-Holstein, Inaugural-Dissertation, Kiel, 1960. (Kiel Stadtarchiv).
27. Гуревич, С. М., *Карл Маркс-Иублаумст*, Москва, 1982.
 28. Hahn, Henning Hans, Möglichkeiten und Formen politischen Handelns in der Emigration, *A.S.G.*, Bd. 23, 1983.
 29. Hanisch, Ernst, *Karl Marx und die Berichte der österreichischen Geheimpolizei*, Schrift aus dem Karl-Marx-Haus, Heft 16, 1976.
 30. Hatin, Eugene, *Histoire politique et littéraire de Presse en France*, No. 8, 1861.
 31. Heine, *Neue Zeitgedichte*, 1844 (貴 A-A419)
 32. Hirsch, Helmut, Karl Ludwig Bernays, Heines Kampfgefährte aus der vierziger Jahren, *Heine Jahrbuch* 74, Jg. XIII, 1974.
 33. — *Karl Ludwig Bernays und die Revolutionserwartung vor 1848, dargestellt am Mordfall Prastin*, Schriften aus dem Karl-Marx-Haus, Heft 17.
 34. Hirth, Fr., Zur Geschichte der Pariser "Vorwärts", *A.G.S.A.*, 5 Jg., 1915.
 35. *Histoire générale de la presse française*, tome II, 1815 à 1871, PUF 1969.
 36. Höppner, Joachim, Einleitung, *Deutsch-Französische Jahrbücher*, Leipzig, 1973.
 37. Hörburger, Raimund, Von Stein et la naissance de la science sociale, *Cahiers internationaux de sociologie*, vol. 55, 1973.
 38. *Jahrbuch der Grillparzer-Gesellschaft*, No. 21-23, Wien, 1912. (早稲田大学附属図書館)
 39. [Jakoby, Johann], *Vier Fragen beantwortet von einem Ost-Preussen*, 2 Auflage, 1841, (貴 A-B 110)
 40. Kagi, Paul, *Genesis des historischen Materialismus*, 1965.
 41. Knieriem, Michael, Wer vermittelte Engels' Mitarbeit an den "Deutsch-Französischen Jahrbüchern"? Eine notwendige Ergänzung. *B.M.E.F.*, Bd. 14, Berlin, 1983.
 42. Koszyk, Kurt, Adalbert von Bornstedt, Spitzel und Publizist, *Publizistik*, Bremen, No. 3, 1958 (東京大学法学部)
 43. — und Oberman, Karl, *Zeitgenossen von Marx und Engels, Ausgewählte Briefe aus den Jahren 1844 bis 1852*, Amsterdam, 1975.
 44. Lafargue, P., Persönliche Erinnerungen an Friedrich Engels, *Die Neue Zeit*, XXIII, Bd. 2, 1904/05.
 45. Lefevre, Jean Pierre, *Marx und Heine*, Schriften aus dem Karl-Marx-Haus, 7, Trier, 1972.
 46. Ludwig, B., Ein Urteil über Marx und Engels aus dem Vormärz, *Der Kampf*, Jg. 12, 1919.
 47. Mayer, Gustav, Der Untergang der "Deutsch-Französischen Jahrbücher" und des Pariser "Vorwärts", *A.G.S.A.*, 3, Leipzig, 1913.
 48. Meiser, Wolfgang, Zur Marx-Rezeption im Bund der Gerechten in Paris 1844/1845, *B.M.E.F.* Bd. 16, Berlin, 1984.
 49. Михайлов, М. И., Новые документы о закрытии газеты, «Vorwärts», *Вопросы Истории*, 12, 1961.
 50. Mommsen, Wilhelm, Julius Fröbel, Wirrnis und Weitsicht, *Historische Zeitschrift*, Bd. 181, München, 1956.
 51. Neher, Walter, *Arnold Ruge als politiker und politischer Schriftsteller*, Heidelberg, 1933.
 52. Netter, Lucienne, *Heine et la peinture de la civilisation parisienne, 1840-1848*, Frankfurt a. M., 1980.
 53. Pelger, Hans, Leserzuschrift zu Artikel von Kurt R. Biermann über Alexander von Humboldt und Karl Marx, *B.G.A.* No. 5, 1985.
 54. Ponteuil, Felix, *Les Institutions de la France de 1814 à 1870*, PUF, 1966.
 55. *Les Proces des sociétés secrètes devant la cour des Pairs, L'Attentat Quenisset*, 13, Sept,

1841. (reprint EDHIS)
56. Rihs, Charles, Lorenz von Stein, un jeune Hégélien libéral à Paris (1840-1842), *Revue d'histoire économique et sociale*, No. 3, 1969.
 57. Röllig, Elke, Wer vermittelte Engels' Mitarbeit an den "Deutsche-Französischen Jahrbüchern", *B.M.E.F.* Bd. 13. 1982.
 58. Ruge, A., *Briefwechsel und Tagebuchblätter aus der Jahren 1825-1880*, Hrsg. Paul Nerlich, Erster Buch 1825-1847, Berlin, 1886.
 59. *Ruge's sämtliche Werke*, 3 Auflage, Bd. 5, Bd. 9. (貴 C-246)
 60. Say, Horace, *Études sur l'administration de la ville de Paris et du département de la Seine*, Paris, 1846. (Franklin, 1893)
 61. Schieder, Wolfgang, *Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung*, Stuttgart, 1963.
 62. Schiller, P., Georg Weber, ein Mitarbeiter des Pariser "Vorwärts" *Marx-Engels-Archiv* vol. 2, Frankfurt a. M., 1928.
 63. Schlechte, Horst, Karl Marx und sein Wirkungskreis in Brüssel. Dokumente aus belgischen Archiven, *B.Z.G.*, No. 1, 1966.
 64. Schmidt, Walther, Zur Geschichte der Pariser Vorwärts von 1844, *Vorwärts*, Leipzig, 1975.
 65. —, *Wilhelm Wolff, Sein Weg zum Kommunisten 1809-1840*, Berlin, 1963.
 66. Semmig, Hermann, Das Deutsche Gespenst in Frankreich, *Orion*, vol. 2 Hamburg, 1863. (Schleswig-Holstein Landesbibliothek)
 67. Smirnowa, W., *Wilhelm Wolff, Marx und Engels und die ersten proletarischen Revolutionäre*, Berlin, 1965.
 68. Strassmaier, *Karl Grün und die kommunistische Partei 1845-1848*, Heft 10. Schrift aus dem Karl Marx Haus, 1973.
 69. Trinh Van Thao, *Marx Engels et le journalisme révolutionnaire*, Paris, 1978.
 70. Wermuth-Stieber, *Die Communisten-Verschwörungen des 19. Jahrhunderts*, I, 1853, II, 1854. (reprint, 1969)
 71. Wolff, Wilhelm, *Aus Schlesien, Preussen und dem Reich*, Berlin, 1985.
 72. 廣松渉『青年マルクス論』平凡社, 1971年。
 73. 的場昭弘『『フォアヴェルツ』誌と『経済学・哲学草稿』及び「ビュレノート」』『一橋論叢』, 96巻2号, 1986年。
 74. —『トリーアの社会史』未来社, 1986年。
 75. 大月誠「1844年のシュレーゲン織工一揆」龍谷大学『社会科学研究年報』No. 2, 1971年。
 76. 良知力『マルクスと批判者群像』平凡社, 1971。
 77. —『初期マルクス試論』未来社, 1971。
 78. 杉原四郎『思想史研究と雑誌』一橋大学社会科学古典資料センター Study Series No. 7, 1984年。
 79. 田中治男「A・ルーゲとその時代—1840年代における政治的急進主義の形成(三)」『思想』No. 605, 1974年。

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 12*

発行所 東京都国立市中 2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1987年3月31日

印刷所 東京都八王子市石川町 2951-9

三省堂印刷株式会社

